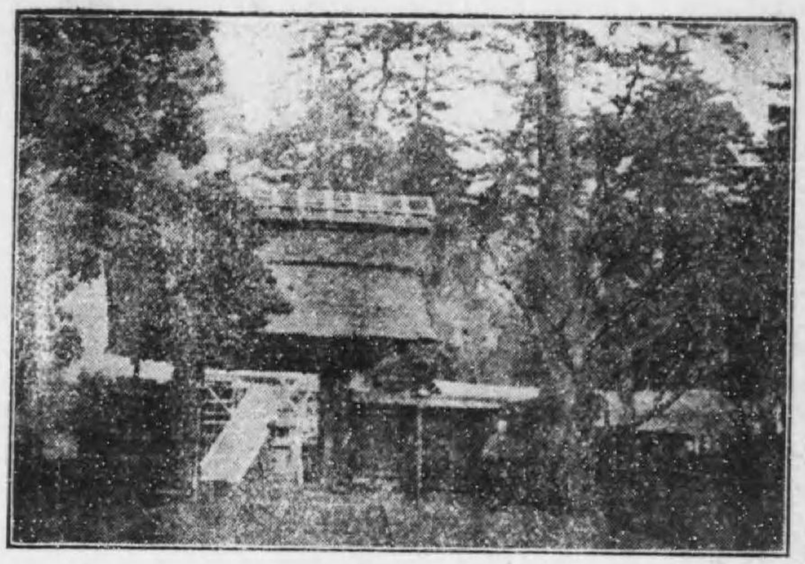


深大寺の景

郊外の史蹟云ふ

此寺は天臺宗で、上野東叡山の末寺で浮岳山昌樂院とも云ふ。此寺の創立については、慶安三年に五十七世の住持辨盛上人の書いた緣起がある。此によると聖武帝の御世に柏野の里（今の佐須村なりと）に右近某と云ふ長者が居て、非常に禽獸魚鳥を捕へ殺すのを好んだ。年長じて妻を嫁らんとすれど誰しも應ずるものがない然るにある時、容姿端麗な女が自ら訪ねて、來て遂に夫婦となつた。其から、妻は折に觸れて理を說いて夫の殺生を次第に止めました。其中一人の娘を生み之が十二三歳になると、福滿と云ふ親の知らぬ男が此娘を戀ひ屢々文を寄せたので

長者夫婦は娘を湖中の離れ島に住はして、二人の關係を絕たうとした。そこで、福滿は湖邊に來て、どうかして此湖を渡らうと工夫を凝した結果、水神眞蛇の力にたよらうと思ひ、若し本望を得たならば、永く祭つて湖水の主となし、且つ此村の鎭守の神となさんと誓をたてゝ祈つたのに、不思議にも一疋の龜が表はれ其に乘つて遂に渡り娘に逢ふ事を得た。そこで、兩親は其不思議に感じて、二人の婚を許して夫婦とした。間もなく此夫婦の間に、一人の利發な男子が生れた。此子長じて、出家して、支那の南京に渡つて法相宗を學んで歸國し、此に一寺を建てた。此が此寺の開山滿功上人で、時は天平五年であつた。

次の孝謙天皇の天平勝寶二年に及んで、滿功上人約束の如く水神を勸請したが、其尊容が分らなかつた。所が新羅國舶來の畫像があつたから、其を手本として、靈夢によつて多摩川から三本の桑木を得て、それで三體の靈像を彫刻し、武、野、羽の三州に分祠した。之が今境內に祀つてある深砂（眞蛇）王祠の本尊で、昔は誰にも尊容を拜む事を許

さなかつた。此祠の南に福満童子の祠もある。

其後、弘文天皇の時勅額を賜はつて、浮岳山深大寺と云ふに至つた。其後、平城帝の時にも、亦清和天皇の御代、武藏國司藏宗の謀反した際にも、惠亮和尙に兇徒調伏の祈禱をなさしめられ、大に効驗あつて、所謂深大寺七村の寺領まで賜はた事がある。此時から法相宗改めて天台宗に改宗した。此後に、源氏の祈願所ともなり、寺運益々隆盛となつたのを、鎌倉將事の家人が子供の事から此寺に怨を持ち、寺に亂入して總てを灰燼にした。かくて一時廢頽して居たのを、吉良氏が世ヶ谷の領主となると、此を再興した。それが、後に天正十八年小田原北條家が滅亡して、吉良家も亡びたので、又保護者を失ふて困つて居たが、家康が保護を加へ、守護不入の地と指定し、五十石の領を賜つた。正保三年春、火災の爲め全部烏有に歸し、今の建物は、其後の建築にかゝるものだ。境内は、老木天を覆ひ、清水は潺々として小河をなし、盛夏も猶冷氣を覺える靜かな別天地である。

今深大寺に、女子水泳のプールがある。寺門より南一町隔てゝ古城址がある。鎌倉年代後記に、

天文六年、上杉朝定、武州深大寺の舊壘をとり、北條氏綱を退治せんとせり。」

とある深大寺の城である。城址の下に、式内の虎柏神社、深大寺の丘に青渭神社がある。

布田下なる至便深大寺ヨリ甘の頭行モ可トス一里半位

玉翠園

國領驛（新宿より二十一錢）より南十八町。園内に一旗亭がある。園の下は、多摩の清流で、鮎獵の好適地である。遊覽船數艘ある。川は水清く、極めて淺いからして、子女の遊び場としては、最も適當である。

布田天神

京王電車布田（新宿より二十五錢）で下車すれば、僅かに三町、調布町の中央にある。もと古天神

と云ふ地にあつたのであるが、文明年間多摩川氾濫の爲めに、今の地に移したのである。祭神は少彦名の命である。社前に數本の梅花がある。櫻の名所稻田堤へ僅かに十五町。郊外史蹟云ふ。

調布の名稱の起りについて、布田天神の緣起の中に見えて居る說がある。餘り信ずるに足らぬ說だが參考に一寸記して置かう。桓武天皇の延曆十八年に、木線の實が我國へ初めて渡來したが、當時未だそれを布にする製法を知る者がなかつた所、多摩川の邊に菅原家の關係者の廣福長者と云ふ者が、布多天神に七日七夜參籠して、遂に神から其製法を授かり、多摩川の水に洒して天皇に奉ると、大に御感があつて其布を調布とのたまひしより、此邊を調布の里と云ふに至つたと云ふ。此町は、南に多摩川があつて、殊に鮎漁によく、また景色もいゝ。

多摩河原

新宿から、多摩河原迄電車賃二十九錢、調布の町からは半道ある。玉華園と云ふ一旗亭がある。納涼地、鮎獵地としては好適である。

三鷹の天文臺

京王線上石原驛（新宿より二十九錢）の北二十町。（府下三鷹村大澤ノ地）この天文臺の敷地は、十萬坪、本館建坪五百七十坪、工費七十萬圓、其設備は東洋第一である。附近は西武蔵野の特徴をよくあらはし、絶好の散策地である。歸途は、北へ二十町中央線の境驛へ出るをよしとする。或は深大寺の遊園地へ廻つてもよい。

人見山

京王電車の多摩驛（新宿驛より三十三錢）の北十町。府中の近郊であつて、小金井の南に當る。古書には人見のことを金井原と云ひ、正平七年閏二月二十日の古戰場である。足利尊氏が、

武蔵守義宗の軍を敗つた所である。

人見山と云ふは、三つの丘である。（最高八十一米、平地五十米）堂山、中山、淺間山の總稱で、淺間山が一番高い。これらの山は、上古、當國國造の墓であるとの說もあるが、眞僞はたしかでない。

府中

新宿驛より電車賃三十七錢。中央線國分寺驛へ一里。多摩の北岸にあり、甲州街道の一驛として榮え、北多摩の治所である。此地中古には、武藏國の首府で、繁華の地であつた江戸起るに及んで、其地位一變するに至つた。古の國府址は、本町に於いて求む可きである。多摩沿岸に、古墳の多きも、この地に武州政治の中心があつたからである。

大國魂神社――府中の惣社で、元六所の宮と稱せられてゐたが、官幣小社に列せられる際今の名に改められた。景行帝四十一年の草創、武蔵大國魂神を祀つてある。境內老

杉鬱々として、千年の色を湛えてゐる。大祭は五月五日、深夜消燈中に、御輿の渡御がある。夜祭とて有名である。

高安寺――大國魂神社の西五町。元市川山見性寺と云ふたが、足利尊氏改めて龍州山高安護國禪寺となし、心悟を中興の祖とした。境內に秀郷稻荷、辨慶の井戸、辨慶橋等がある。

田原藤太秀郷、武蔵守であつた時の館址だとか、或は、武蔵坊辨慶が義經の御伴をして暫らく隱れてゐた土地とも云はれてゐる。

稱名寺――遊行道場である。近世寺領三十石。本覺山眞如寺（妙光院）と共に、名刹である。

分陪河原の古戰場

大國魂神社より約八町。分陪は、分倍、分梅とも書き、古訓は、ブバイである。南は、

多摩川に接し、北は武蔵野原に連る一望際涯なき曠原で、鎌倉時代迄は、東山北陸へ通ずる要地に相當してゐた。されば戰場になつたことも暫々ある。

(一) 元弘三年……新田義貞鎌倉討入りの時、北條泰家と戰ふ。

(二) 建武二年……諏訪三河守、三浦介清久等、鎌倉に赴かんとして、澁川義季、小山秀朝らと戰ふ。

(三) 永德元年管領氏滿、小山藤政を討たんとて、高安寺に陣して、上杉憲方をして攻めしむ。

(四) 永享十年……管領持氏、上杉憲實を討たんとして、一色時長を上州に赴かしめた。九月憲實は、此地に襲來して、持氏の軍を破つた。

(五) 永祿四年……上杉景虎、北條の家人中條出羽守と戰ふ。

霞ケ關

古歌によまれたる霞ケ關に就いては、いろ〳〵の說があるけれ共、現在の關戸であると見る說が最も穩當であると思ふ。關戸の中の何處こ、明かにさすことは出來ないが、關戸の中であることは、考へえられるのである。(回國雜記、方角抄、曾我物語宴曲善光寺詣りを參照して、しか斷ずるのが至當である。)

關戸は、府中から一里。多摩の南岸である。

京王電車沿線名勝一覽

神宮裏	明治神宮	南	三丁
	代々木練兵場	同	三丁
	十二社權現	北	三丁
初臺	代々木八幡宮	南	六丁
	幡ヶ谷不動尊	北	五丁
	八幡太郎洗旗池(小笠原邸內)	北	三丁
幡ヶ谷	大山園	南	八丁
	駒場農科大學	南	二十町
笹塚	府營住宅	南	一丁

代田橋	松蔭神社	南十五丁	西三丁
	大圓寺（戊申戰死者の墓）	北十丁	南十三丁
	妙法寺（祖師）	北廿五町	
松原	宇佐神社	南十八丁	西十丁
	豪德寺（井伊掃部頭ノ墓）		
下高井戸	吉田八幡宮	北三十四丁	東一三丁
	大宮八幡宮	北十四丁	南三三丁
	覺藏寺藥師鬼子母神	西七丁	南三三丁
北澤	上水ベリノ櫻	北二丁	南十六丁
松澤	松澤病院	スグマエ	南十五丁
烏山	岩本梅園	北一丁	北二十一丁
	井ノ頭公園	北三十町	
柴崎	深大寺元三大師（國寶金銅釋迦像）	西北十四丁	南二十一丁
	式內鄉社青渭神社	同十四丁	南八丁
國領	玉翠園（有栖川大宮殿下御譽松）		
	多摩川鮎漁場	南二十八丁	同七丁

布田	布多天神	西三丁	南十三丁
	中ノ島渡船（中ノ島ノ櫻）		
	菅ノ渡船（稻田堤ノ櫻）		
調布	富士見園	西十丁	南十三丁
	玉華園	東一丁	南一一里
多摩川原	多摩川原公園	南三丁	南八丁
	多摩川鮎漁場	南三丁	同八丁
	多摩川水泳場	南三丁	南一一里
	稻田堤ノ櫻	南十五丁	北二十丁
	八洲園		
上石原	八幡神社	南二丁	南二丁
	天文臺		
	多摩川渡船	南七丁	同七丁
	多摩川鮎漁場		
飛田給	押立渡船		
	多摩川鮎漁場		
	百村妙見神社		
	御獄教會（普寬講）		
車返	本願寺（藥師）	南スグソコ	南一一里

多摩	是政渡船	南	十六丁
	多摩川鮎漁場	同	
	淺間山	北	十丁
八幡前	八幡神社	南	二丁
	官幣社大國魂神社	南	スグソコ
	善明寺（國寶阿彌陀佛）	南	四丁
	安養寺（淺草觀音分體）	南	五丁
	御殿山（國府跡）	南	四丁半
	武國府園	西	三丁
	高安寺	西	五丁
	秀卿古荷（辨慶の井戸）	西	十町
	分倍川原古戰場	南	十六丁
	多摩川鮎漁場（庚塚）	南	十八町
府中	市川梅園	西	一里
	谷保天神	北	一里
	小金井	北	二十丁
	國分寺舊跡	西	一里半
	百草園	同	
	高幡不動尊	同	二里
	普濟寺		

（最近府中至八王寺に至る、王南電車が開通した。百草園へゆくには便利になつた。）

◉遊覽の栞

一月　吉田園ノ天然氷滑リ

二月　節分豆撒大國魂神社安養寺、秀卿稲荷ノ初午

三月　三、四日深大寺元三大師　布多天神　武國府園　岩本梅園　市川梅園等ノ梅

四月　中旬十二社ノ櫻、稲田堤ノ櫻、玉川上水べリノ櫻、下旬小金井ノ櫻、當月ヨリ九月一杯吉田園ノ瀧ト温泉アリ

五月　五、六日大國魂神社ノ大祭、中旬高千穗商業學校ノ運動會、廿一日十二社熊野神社大祭

六月　一日多摩川鮎漁解禁、九月一杯マデ川遊ビノ好季

七月　多摩川ノ鮎漁ト舟遊ビ

八月　多摩川水泳ト納涼、廿日大國魂神社李子祭（烏扇授與）

九月　十五日卿社宇佐神社調布八幡宮府中八幡宮の大祭廿三日代々木八幡宮ノ大祭
十月　十五日銃獵解禁、向ケ岡　獵場、三十一日天長節祝日代々木練兵場觀兵式
十一月　三日明治神宮大祭、酉ノ市大國魂神社、多摩川原ノ秋色、深大寺、本願寺ノ紅葉
十二月　吉田園ノ天然氷滑リ、冬至、百村妙見神社ノ祭典

明治大學野球場

玉川電車三軒茶屋驛（澁谷より七錢）より、七町。野球試合の日には、賑ふのである。球場わきに明大野球部選手の合宿所がある。三軒茶屋より二町許りの所に目青不動がある。境内は都下屈指の櫻の名所である。

園藝學校

多摩川雨中の渡船

玉川電車駒澤驛（澁谷より十二錢）より約七町。府立の學校で田園の情趣一入である。

玉川遊園地

玉川電車遊園地前停留場で下車。一萬餘坪の大遊園地で設備は整つてゐる。遊園地下には玉川菖蒲園がある。又これより一つ先きの玉川で下車すればソコは、有名な二子の渡しである。附近には、旅館料理屋が多い納涼地として又鮎獵地として繁盛してゐる、鵜飼舟も出る。

屋根舟船頭付	一圓以上
鵜飼一組	一圓五十錢以上

投網　六十錢

羽根組　一組　二圓五十錢見當

二子渡の對岸には、梅の名所が多い。(川邊の梅林)

大藏の氷川神社

玉川電車大藏驛で下車。(澁谷より二十二錢)氷川神社はこの附近の名祀である。この邊一帶多摩の風光絶可である。この地から、喜多見、沼部へかけて古墳が多い。府中からこの邊へかけて上古中古に於いて武州文化の中心地であつたからである。

砧の里

玉川電車の終點である(澁谷より二十二錢)今、大藏、鎌田、宇奈根等を合せて砧村と呼んでゐる。古木田見氏は江戸氏の裔で、江戸重長は、源頼朝に登庸せられてゐたのである。多摩

の眺め一入である。

多摩川は、西多摩郡雲取山の奥から發し、市之瀬川と云ひ、柳澤川、黒川を合し、丹波川の名あり。峽谷を流るゝ十有五里、青梅町に至つて、漸く山を離れる。

秋川、淺川等を合せ武藏野の南偏を貫き、凡十七里、羽田鼻に至つて東京灣に入る、末流橘樹、荏原兩郡界を爲す邊に至つて、六郷川と呼ばれる。(古名は石瀬)

かゞり火の影にぞしるき玉川の
鮎ふす瀬にはひかりそひつゝ

(夫木集)

目黒不動

有名な目黒不動は、院線目黒驛の西九町。行人坂を下る五六町の所にある。目黒、蒲田間の電車に乘り、不動前で下車すれば大して歩かずにすむ。(六錢)目黒の里は、郊外散策地としてよい所である。目黒川に沿ひ南北一里にわたり、上中下の三區に分れてゐる。

行人坂は、白金臺より中目黒に至る坂路で、（この上丘を夕日岡とて昔は紅葉の名所であつた。今は其面影がない）寛永の頃、羽州湯殿山の行者が、此に大日如來の堂を建てた。又明和九年建立の五百羅漢もある。行人坂の目黒川に架した橋は、太鼓橋と云ひ、木食上人の創意になつたもので、柱を用ひず兩岸から石を疊み出した、奇妙な橋である。

明和九年二月廿九日の江戸の大火は、行人坂から出火したので、「行人坂の大火として知られてゐる。（丁度此時本郷丸山からも出火し爲めに江戸の目黒不動は、瀧泉寺と號し、近世は寛永寺に屬し、泰叡山の號を建て、府下著名の一靈場であつた。三代將軍、郊外放鷹の行營を此地においてから著名になつたのである。惜しい哉創立不詳である。境内に瀧あり、又堂の後ろには、廿諸先生（青木昆陽）の墓がある門前には料理屋あり、春は筍飯、秋は栗飯を名物としてゐる。

又不動院の北方二町に日本武尊を祀つた大鳥神社がある。毎年十一月の酉の日には大繁

▲……最近目黒には、競馬場が出來てゐる。驛より半道。

盛をする。又不動院の前を右へゆくこと半町、比翼塚と云ふ平井權八と傾城小紫とを埋めた塚がある。權八は、遊蕩の極辻斬をやつたりしたが、生れは、立派な武家であつた。父は因州鳥取松平相模守の六百石取の家臣平井庄左衛門であつた。幼少の頃父が同僚の本莊助太夫に飼犬の一件から辱しめらたのを憤慨して、仇を殺して江戸へ逐電してから、次第に遊蕩を覺えたのであつた。

郊外史蹟云ふ。

此寺は瀧泉寺と稱して天臺宗である。江戸時代から一靈場として參詣者の多い所だ。然し其創立についての確說は分らない。傳へによれば往古日本武尊を祀つて荒人神と稱して居たのを、慈覺大師が、巡行の途次此地に宿し、里人の請ひに依て、日本武尊の像を彫刻して祀られた。然るに、其像は、尊が燒津に於て賊徒に火攻めにせられた際の像を彫られた爲めに、左手に犬の切縄を、右手に草薙の寶劍を持ち、火炎の中に立つて居られる像であつた。其が如何にも不動尊に似てゐる爲めに、これを神體とせられたと云ふ

事だ。又一説には、品川常行寺の護摩堂の本尊を移したものだとも云ふ。不動尊として世に知られ初めたのは、或時三代家光が、此地を鷹狩の行營とせられてからの事である。

仁王門を入つて石段の下に獨鈷の瀧がある。これは銅の瀧口から水を吐いてゐる。小い瀧であるが水が冷かである。境内にはまた不動の瀧といつて、清冷な瀧がある。あたりには欝蒼たる老樹があるから、夏は殊にいゝ處である。本堂の背後には大日堂、虚空藏堂、鬼子母神堂などもある。

祐天寺

不動堂から約十町。芝三縁山増上寺第三十六世祐天和尚隠居の地である。惠心僧都作と傳ふる阿彌陀佛が本堂に安置してある。祐天は高徳の僧で、下總成田山に修業し、同國羽生村與右衛門の娘の怨靈を解脱せしめてから、其名天下にあらはれたのである。本堂前を

左に折れるとスグ林の中に、祐天の墓がある。

桐ケ谷の瀧

目黒の不動に御詣りしたら歸りには、桐ケ谷の瀧（氷川神社境内）を見るをよしとする。桐ケ谷から五反田へ出れば、丁度いゝ散歩である。安樂寺には連理塚とて、權八小紫の墓がある。小紫が權八の跡を追つて行人坂上に自刄したのを寺僧が持つて來て此處に埋めたのであると云はれてをる。目黒の比翼塚よりは此方が本當らしい。

洗足の池

目黒蒲田電鐵線洗足驛（十二錢）で下車し丘陵起伏し所々雜木林の間を抜けて七町にして達する。東西二町、南北五十間の綺麗な池である。舊千束に作る。恐らくは、千僧供料の免田などより起りし名か。

往古日蓮上人が袈裟をかけたと傳へらる袈裟掛の松が池畔にある。又日蓮上人の像を安置した御松庵と云ふ堂もある。御松庵の門前から境内に沿うて行くと二町、勝海舟の墓と、西郷南洲の記念碑がある。（南洲の碑は元、南葵飾の上木下川村淨光寺境内にあつたのであるが、荒川改修工事の結果、大正二年八月に此の地に移されたのである。）

勝海舟の家は、德川氏三河以來の旗本である。海舟が、幕末史を飾る中心の人物であることは、今更ら云ふ迄もない。明治三十二年一月、七十七歳天壽を完うして薨じた。

洗足から池上本門寺及び目黑不動へは何れも一里である。（この池畔は最近府立公園として設備せられることになつておる。池畔に茶亭數軒ある池から一寸離れた所に、水光亭春洋軒など云ふ洋食店がある。）

伊藤博文墓

洗足の池から、伊藤公の墓へまいり、院線大井驛へ出て歸るは、半日の散索としては、誂へ向きである。伊藤公の墓から大井驛迄僅かに十町である。

伊藤博文公は、明治維新以來國事に奔走した偉人である。明治四十二年十月二十六日ハルビン驛で、排日主義の鮮人安重根に狙撃せられて非業の死をとげた。（六十九歳）公の墓地は近年殖林をしたので、樹木鬱蒼としてゐる。公の墓から五丁ばかりの所に。恩賜館址がある。伊藤公が相州の夏島で、帝國憲法の草案を作り、この建物の内で討論決定したと云ふ歴史ある建物である。今明治神宮の神苑の中へ寄附せられた。

奥澤九品佛

目黑蒲田電鐵線奥澤驛で下車すれば、（十八錢）僅かに數町である奥澤は等々力の東で、品川へ二里。

九品佛堂は、淨眞寺、唯在念佛院と號してゐる。元は吉良家の家人大平出羽守の住地あつたが、寛文五年に寺地となつた。開祖は珂碩上人で、本堂の向ひに三佛堂あり何れも九間六間の堂で、堂毎に丈六の阿彌陀佛三體づゝを安置したので、九品佛堂と唱へらるゝに

至つたのである。

小山田與清世田ヶ谷紀行云ふ。

奥澤村の九品佛にまうづ、こゝをひらかれし珂碩上人のいしぶみのことばゝ、元祿十一歳次戊寅夏四日沙門珂然が撰しなり。鐘の銘に、

武州荏原郡菅苅庄奥澤郷九品山唯在念佛院淨眞寺、珂碩上人之草創九品之倶倉之靈境也、寶永五戊子歳五月吉祥日。

とあり。

この所は吉良家の家臣大平出羽守がすみしあとにてなほ濠のかまへなどいちじるし。めぐりはいみじき深田にて、今も橋ならでは田兒がおりたちかなはぬばかりの要害なれどはかなく敵のためにほろぼされけんは、いとたのみなし。おりふしほうしたち色めきてわざの鐘うちおどろかしければ、

ものゝ布のせめをふせぎし城のあとに

かねうちならすかりの庭かな

等々力の瀧

九品佛へ詣でたらば、等々力不動堂の瀧へ杖を曳く可きである。堂から右に石段を下りると、崖と崖との間から瀧が落ちてゐる。この瀧は溜り水でなく、本物の清水だから涼しい。瀧の附近に茶屋もある。半日の涼をむさぼるによい。こゝから玉川へいつて鮎獵をするもよいし、又は、滿願寺に細井廣澤の墓をたずぬるもよい。寺門の額致航山と云ふ字は廣澤の書で頗る雅致に富んでゐる。

暇あらば、こゝから碑文谷をへて目黒の方へ歩いてみるとよい。其間には、竹藪あり、雜木林あり、細流あり、十分に南郊の幽趣を味ふことが出來る。

小山田氏世田ヶ谷紀行云ふ。

等々力村の滿願寺にまうでぬ。後の山に細井氏がおくつき所ありて、

廣澤先生細井君之墓豪德院不孤有隣大居士諱知愼字公謹號廣澤、姓藤原氏細井父知治
母山本氏萬治元年戊戌十月乙亥八日生遠州懸川享保二十年乙卯十二月巳丑二十三日戊
子卒于江戸城西干寢、享年七十八孝子知文立
としるせし石そとば見ゆ。

備考　調布驛の南十四町。
又多摩川停留場から二町に龜甲山と云ふ小丘がある。眺望頗るよい。驛の前に
淺間神社がある。丸子驛には電車會社經營の水泳場がある。

調布野球場

目黑蒲田電鐵調布驛（十八錢）で下車すれば、球場迄數町試合は毎日のやうに行はれてゐる
が特に日曜日の野球試合には大勢の人が出る。
この附近は、近き將來に於いて田園都市の住宅地として、所謂文化村となるべき所であ

る。この邊から多摩川へかけての散策は、是非御すゝめしたい。
調布驛の次ぎの多摩川、武藏丸子驛は、絶好の納涼地である。旗亭もある。

光明寺

目黑蒲田電車鵜ノ木驛下車（三十錢）。光明寺は淨土宗で、雷留觀音堂がある。立像三尺、
殊勝の古佛である。此像は、寛喜の頃、開山善惠上人が、鎌倉八幡へ七日の通夜をした其
翌朝、門前で出會ふた異僧から授かつたもので、屢々光明を放つたと云ふので、光明寺な
る寺號をつけたと云ふことである。又觀音の像の裾が燒けてゐる。これは新田義興の怨靈が
雷となり、敵の江戸氏を討ち放した際燒けたものだと云はれてゐる。これ以來雷除けの佛
となつて尊敬せられてゐる。
此村から池上へかけては、原人居住の遺跡で、貝塚石器土器が散亂してゐる。この寺に
も古碑が多い。光明寺池では毎年七月土用に鰻の放生會がある。

新田神社

目黒蒲田電車武藏新田驛（三十錢）で下車。新田神社は新田義興の靈を祀つてある。古くは新田大明神と云はれてゐた。社の隣一三町の所に義興と運命を共にして十士を祀つた十騎社がある。又こゝから三四町矢口渡に近い所に、俚俗頓兵衛地藏と云ふのがある。頓兵衛とは、義興を横死せしめた船頭の名である。新田から池上本門寺迄十一町。

郊外史蹟云ふ。

義興の戰死の事は太平記三十三卷の末に委曲を盡してゐる。義興の戰死した矢口は此地でなく、多摩郡の矢野口だと云ひ、矢野口に於ても、義興戰死の事を傳へて居る。

義興は父義貞越前にて敗死の後、密に武藏に逃れ、頻に同士を糾合して居た。所が鎌倉管領基氏の執權畠山道誓が聞いて大に恐れ、竹澤江戸の二氏をして、詐つて義興に降伏さして義興に鎌倉討入の事を勸めた。そこで二人は矢口の渡で待ち伏せ、船頭をも語ら

つて船底に穴をうがつた舟に義興を乘せ、川の中流で穴から水を入れて沈沒させやうとした。そこで、義興は欺かれた事を悟り、大に怒りて自ら入水して自殺した。二人は、船頭に首を求めさし、功によつて鎌倉から數ヶ所の領地を與へられた。その江戸氏が、領地に赴く途中矢口渡に來ると、急に雷鳴り、風起り、舟は沈んで、江戸氏は、遂に雷に打たれて七日の後死んで了つた。其翌夜、鎌倉に居る道誓は、義興が黑雲の上で、多の鬼を率ゐて鼓を打ち、車を引いて、入間川に在陣してゐる基氏の陣營に攻め入つたと夢想した。そこで人を以て私に探ると、入間川の民家が雷火の爲めに數百戸燒失して居たといふ。

又此後矢口の渡には夜々怪しい火が現れて、人をなやましたので、此れ義興の怨靈ならんとて村人が集つて社を建てゝ祭つたと云ふのだ。

今の社は、南朝の忠臣を祠るものとしては誠に粗末なものである。社後に竹藪があつて、義興自害の場と云ひ傳へて居るが、こゝは何となく義興の横死を忍ぶ種となる。昔

多摩川は、此地を流れて居たと云ふことである。

六郷の梅林めぐり

目黒蒲田電車が開通したので、六郷の梅林めぐりは、大變に便利になつた。けれ共、一日の散策を試みるには、京濱電車の梅屋敷（品川八ッ山より）（十五錢）で下車して、蒲田の梅林から振り出すをよしとする。この梅屋敷は、江戸名所圖繪にも書いてあり、可成古くからある。老梅樹數百株、花季はいかにも美事である。

こゝから、六郷の堤防を上へとすゝむ。數町にして原村、又十餘町にして小向井の梅郷へ出る。一村悉く梅花と云ふありさまで、野趣に富んでゐる。蒲田、小向井、原村の梅を見て、矢口渡から池上本門寺の方へ出るもよし、又舟で、羽田の方へ下るもよい。

東海道線

附京濱電車、横須賀線、豆相線

東海寺

品川町北品川にあり、京濱電車北馬場より三町。（五錢）臨濟宗の大伽藍。澤庵和尚の創立したもので、維新迄は、寺領五百石を持ち、大勢力があつたのである。けれ共維新の際殿宇燒失し、更らに近年境内を割いて宅地としたので、昔の面影がない。

澤庵和尚の墓、及び國學者加茂眞淵の墓がある。

品川町西北一帶の高臺は、御殿山と云はれ、長錄の頃太田道灌の屋形のあつた所と云ひ傳らられてゐる。三代將軍迄は、大々名の江戸參勤の時には、將軍は放鷹にかこつけ

て、品川迄出迎へるを常とした。其頃は、將軍の假の御殿があつた。舊幕の頃は櫻の名所として知られてゐたが、今では、富豪の邸宅地となつてしまつた。

海晏寺

京濱電車鮫洲驛で下車。（八ッ山より五錢）僅かに一町である。近年迄紅葉の名所で、俗謠にも「アレ見やしやんせ海晏寺、眞間や高尾の龍田でも及びないぞい紅葉狩」と謠はれた程であつたが、近年老木を伐採した爲め杖曳く人がなくなつた。

寺は建長三年の草創。當時品川の濱で捕れた鮫の腹から觀音の靈佛が出たのを、北條時賴が聞き知り、建長寺の道隆和尚をして開山たらしめたのである。

境内に、梅若實翁の銅像、松平春嶽、岩倉具視等知名の士の墓がある。

鈴ケ森

京濱電車鈴ケ森より僅かに一町。（五錢）鈴ケ森八幡は、盤井神社と云ふのが正しく、始め麻布古川町にあつたのを寛永の頃この地へ移したのであると云はれる。八幡から數町南に刑場のあとがある。路傍に「南無妙法蓮華經」と彫んだ石のある所が夫れである。

大森海水浴

京濱電車海岸で下車すればよい。（九錢）院線大森驛迄は九町。水は綺麗でないから、海水浴場としては適しない。海に臨んで、松崎、伊勢源など云ふ旅館料理屋がある。砂風呂で人を呼んでゐる。

池上本門寺

院線大森驛、京濱電車「大森」から西南二十五町。日蓮宗の一本山で、宗祖入滅の一遺蹟である。山内に星亨の墓がある。

毎年十月十二日から十四日迄御會式とて、大繁盛を極める。光明館明保野樓其他旅館料理屋が多い。

大森八景園

東海道線大森驛上の丘陵に八景園がある。梅の名所として、久しく都人士に知られてゐたが、惜しい哉今は一私人の別莊となつてしまつた。八景園のある丘は、一名木原山と云はれ、家康に奉仕した木原氏の館址であると云ひ傳へられてゐる。吉田氏云ふ。

木原山は、標高二十米餘の丘陵にして、其東北の坂路を八景坂と云ふ。蓋古驛路とす木原氏近世此地を采邑としけるより、木原山と云ふなり」

と。

明治十三年に、東京帝大講師米人モールス氏が、此地で貝塚を發見した。これが動機となつて、日本に於いて考古學の研究が始められたのである。

森ケ崎

京濱電車の蒲田驛から、約十町。比較的新らしく開けた所だが、世離れてゐるのと、海が近いのとで靜かに一夜をすごすことが出來る。旅館兼料理屋が多く、つれ込みが目的である。可人舍、養生館、光遊館、盛平館、などがよい。

羽田の穴守

品川八ッ山から穴守行きの電車が出る。(往復五十錢) お稻荷樣で有名な所である。社の背後に扇ケ浦海水浴場がある。羽田には、料理屋、旅館が多い。(茲には大運動場もある) 羽田館は特に有名である。

羽田から、船に乘つて、川崎大師へ出るをよしとする。

川港大師

京濱電車は川崎停留場から分れて、大師の前迄ゆく。（八ツ山より往復五十錢）けれ共、途中の六郷堤は、櫻の名所であるからして、夏期は徒歩の方がよい。大師堂は、金剛山平間寺と號し、厄除けに効ありとて繁盛する。今寺内の一部を遊園地にしてゐる。寺前に料理屋、旅館が多い。俗化した地である。

總持寺

京濱電車「總持寺」驛下車。（八ツ山より片道三十錢　往復五十錢）曹洞宗の大本山で、能登國から此地へ移轉したのである。寺域は、鶴見臺と云はれる高臺で、東京灣を大觀する風光は、頗るよい御籠り料を出して坊へ泊めて貰ふもよい。

花月園

總持寺の隣りにあり、新橋花月の經營にかゝる一大遊園地である。四季とりぐの面白味がある。園内に東洋屈指の庭球コートがあり、鶴見トーナメントは、日本庭球界の重要なる年中行事となつた。

生麥事件の碑

花月園から僅かに五町。文久二年八月、島津久光の從者が、英人を斬つて、外交上の大問題を惹起した史蹟である。

新子安海水浴場

京濱電車新子安驛から僅かに一町。（八ツ山より片道三十錢往復五十九錢）海水浴場は、京濱電車の經營であ

るからして、費用は要らない。毎日いろんな餘興などもやつてゐる。

東京近傍では、茲迄くると、始めて水が清くなつて、海水浴場と云ふ氣持になれる。附近に浦島寺がある。今では、護國觀福寺と稱してゐるが、昔は浦島院又は浦島寺と呼び、境内の浦島明神は浦島太郎を祀つたものだと云ひ傳へられてゐる。

横濱港

横濱は神戸と共に日本の二大貿易港の一と云はれてゐたが、大震災の痛手は容易に快復することが出來えない。神奈川は、古くから東海道の一驛として繁盛したが、横濱は一漁村であつた、然るに慕末開國の氣運に促されて、新たに港となつたのである。僅か五十年位の間に今日の繁盛を見るに至つたのである。

郊外の史蹟云ふ。

【開港當時の横濱港市】 幕府は安政六年六月を以て、愈開港の期と定め、神奈川奉行を

以て港市一切の事務を掌らしめることゝした。そこで、先づ市街を海邊通、北仲通、辨天通、本町通、南仲通の五筋に區劃し、新市街の中央に運上所を建設して、奉行以下の役人が此に出張し、税關及港務部の事務を取扱ふことゝなつた。尚海岸には東西の二箇所に波止場を築いて改所を設け、東のは外國人か輸出入貨物揚げの場とし、西のを内國商人の荷物揚げ場とした。今日暴風雨標や報時球のある場所は即ち當時の東波止場であつて、現今の税關のある邊は西波止場であつた。市街の建設や海岸の築造は大體以上の如くであつたが、尚外國人居留地の設定問題も起つたので運上所を以て彼我の境界と定め、以東を外國人居留地以西を内地人居住地と定めた。運上所は維新後神奈川縣廳に當てられたが明治十五年火災に罹り、後再び建築せられた。明治三十二年條約改正が出來て、同時に居留地制を撤廢したので、從來の居留地は山下町と改名せられた。今左に現今の横濱港につき其一般を述べると同時に開港場一般に關する概要を記しておく。

【開港】 外國との通商を許された港を開港、又は開港場といつて、貿易は必ず此開港に

於て行ふべきもので、海難其他已むを得ざる事故ある時の外に、外國貿易船は、決して開港以外の港灣に出入してはならない。從つて貨物の輸出入も開港以外の場所に於てすることを禁ぜられて居る。

【港界】 開港には必ず其港の區域が定められて居る。之を港界と云ふのである。横濱港の港界は市の東南端なる本牧十二天鼻より其東北海上にある燈船（本牧燈船と云ふ）まで、更に之より西北に向ひ、鶴見川の河口の東岸迄引いた一線で、十二天鼻から鶴見川の口迄約四浬、灣入約二浬半に及ぶのである。

【防波堤】 港内には、東及北の二大防波堤があつて、自然港内を内港と外港との二つに分つて居る。此はもと港内へ時々東南から巨濤の襲來することがあつて、船舶の碇泊に不便が多いから、明治二十二年四月築港工事を起し、同二十八年十二月に竣功したのである。即ち堀川口の沖合から北方に向ひ、孤狀に延出する五千三百八十呎の波堤は東水堤と稱へられ、又舊神奈川砲臺東角の東方約二鏈の處から南東に向ひ弧狀に延出する六

千七百呎のものは北水堤と稱せられて居る。此二堤が港心に於て相迎合し、其間に一條の港門を開いて居るので、此が即ち般舶の内港に入るべき航路である。

【港内の區劃】 港内は四區に區劃されて居る。即ち萬國橋附近の沖合から北東に向ひ、北水堤の立標まで直線を引いて、此線から北西を第一區とし、以東の内港を第二區とし、東水堤燈臺から東に向ひ港界まで引いた直線以南を第三區北水堤から正東に向ひ港界まで引いた一線以北を第四區と稱するのである。

斯く港内を區劃するのは、主として港内整理の必要上から起るので、船舶の種類其大さ及び搭載貨物の種類によつて入港船舶を一定の場所に碇泊せしむるを便利とするからである。本港に於ては第一區と第二區とを汽船、小帆船、雜種船の碇泊とし、第三區を軍艦の碇泊所とし、第四區を爆發物又は容易に燃燒すべき品物を搭載する船舶及び登簿噸數三百噸以上の帆船の碇泊所と定められて居る。

【棧橋】 海岸なる西波止場から沖合に一千九百呎の鐵脚棧橋を設け、棧橋と横濱停車場

との間に鐵道を敷き、內外貨物の運搬に便にしたが、此棧橋は目下改築中である。

【繫船岸壁】 横濱港の發達に伴ふて、出入船舶の數を增加し、啻に陸岸繫船所の必要を感ずるばかりでなく、上屋、倉庫の設備も必要とするに至つたので、明治三十三年に稅關の敷地として港內の一部を埋立てることゝなり、長二百間幅七十間の長方形にして、凹字形の一區域を埋築し、其外側の岸壁を繫船所となし、埋立地內には上屋、倉庫を設け、岸頭には起重機を据ゑ、鐵道を敷設し、以て輸出入貨物の出入に便ならしめんとした、今や此計畫が完成されて横濱港の活動に尠からぬ利便を與へて居る。横濱市民は此稅關の新埋立地を稅關の新港といひ、又新稅關構內とも稱して居る。此稅關新港は、橋梁と鐵道とによつて、横濱市街と連絡して居る。卽ち西は鐵道によつて横濱停車場に通じ、西南は二個の橋梁によつて海岸通りに通じて居る。卽ち一は萬國橋によつて地方裁判所の通りに通じ、他は新港橋によりて稅關に通じて居る。

新港の外側は、卽ち繫船岸壁で其延長一千百二十二間半に及び、十三隻の船舶を同時に

繫碇せしめることが出來る。岸壁の繫船すべき場所には、第一號、第二號等それぞれ番號が付けてあつて、岸壁の東南端より數へて第一號（No. 1）に始まり、西南端の第十三號（No. 13）に終つて居る。岸壁附近は水甚だ深く、能く二萬噸內外の大船を繫泊せしむることが出來る。

櫻木町を起點として、市內名勝舊蹟への距離、（櫻木町は電車驛で、舊横濱驛である）

野毛山（伊勢山大神宮）	西八町
掃部山（井伊直弼の銅像がある）	西北十一町
根岸不動堂	南一里三町
十二天社	東一里
三溪園	東南一里十町
屏風ヶ浦	南一里十町
横濱公園	東南九町

神奈川縣廳……東八町
税　關……東九町
根岸競馬場……南三十町
横濱正金銀行……東三町

市中には、電車の便がある。

三　溪　園

横濱電車本牧終點から五町。富豪原富太郎氏の私邸で、之を公開してゐる。山海の勝あり。横濱市第一の遊覽地である。

こゝには、種々古美術に關係深い建物が多い。一二を擧げると、河内の觀心寺から還した楠公社がある。(建武元年に正成が建てたもので、公の守護神午頭明王が祀つてあつた)又昔は鎌倉にあつた日本唯一の女人救濟の機關であつた、東慶寺もこゝに移されてある。

眺望も絶佳である。一度は、是非共杖を曳いて、歴史を研究すべきである。

こゝより杉田に至る一帶の海岸は所謂屏風ヶ浦で、外人はかの米國水師提督ペリーの命名にならつてミシシッピー灣と呼んでゐる。

杉田の梅林

杉田の梅林

杉田の梅林の名は、徳川時代からあらはれてゐた。横濱から約二里許りの所にあり、海に面した山腹に梅樹がある。特に妙法寺境内の珠簾梅は著名である。小高い丘から海を隔てゝ房總の山を眺める風光は誠によい。料理屋や茶店もある。

杉田へいつたら、金澤八景へ出て、夫れから、鎌倉へ入ると面白い。

金澤八景

金澤へは、杉田から二里、逗子及び鎌倉から一里强である。金澤は、鎌倉幕府の時分には房州との交通路であり、同時に風光のよい所であるからして、鎌倉の人々が爭ふて遊びにきたものである。稱名寺や金澤文庫が出來たのも夫れが爲めである。金澤文庫址は、稱名寺の境内にある。

昔は金澤の入江は漫々と海水をたゝへてゐたが、今では、大部分陸地と化してしまつた。夫れでも東京あたりの人の別莊がある。

金澤は三方丘陵を以て圍まれ、東方の一面が海に臨んでゐる。野島夏島などの小島を前に控へて眺めは絶佳である。八景は

洲崎の晴嵐　　瀨戸の秋月

小泉の夜雨　　乙艫の蹄帆

稱名寺の晩鐘　　平潟の落雁

野島の夕照　　内川の暮雪

金澤の風光を大觀するには、一覽亭、九覽亭が良い。泥龜新田の牡丹園は、天下に誇るに足るものである。金澤には、東屋、千代本など云ふ旅館がある。納凉には好適である。

新撰名勝地誌云ふ。

杉田より丘陵の相蟠れる間を行けば、二里餘にして、有名なる金澤八景の地に達すべし。金澤の海濱に海水浴場あり。またその地より二里餘にして鎌倉雪の下に達すべく、三里にして横須賀に至るべし。浦郷を經て横須賀に至る乘合船あり。途中の風景よし。

金澤八景は大明の心越禪師が支那の西湖に似たりとて、準擬して八詠の詩を賦したるに始まり、近江八景と共に、最も名高し。即ち洲崎晴嵐、瀨戸秋月、小泉夜雨、乙艫歸

帆、稱名寺晩鐘、平潟落雁、野島夕照、内川暮雪これなり。昔はその勝最も著名に、景致もこの海岸に冠たりしならんかなれど、海水減退して、今は田畝多く、さしてすぐれたる所とも覺えず。且つ交通の便に乏しきため、遊客比較的少し。能見堂は八景を眺望する第一の勝地にして、金澤より同下村にいたる坂路の上にあり。かの巨勢金岡が揮筆したる舊址と稱し、往昔は大なる堂宇ありしも、今は一小堂を留めたるのみ、祠畔に揮筆の松あり。此所より見れば、海上に夏島、猿島、烏帽子島等の小島星散羅列し、さすがに風致に富めり。山を下れば瀬戸にいたる。海水深く入りて、茶樓これに臨み、風景佳し。西に一町、瀬戸明神あり。九覽亭は八景の外に能見堂をも併せ見るを以てこの名あり。この亭よりは野島の夕照を見るに最も適せり。野島より西すれば、地方に有名なる泥龜新田の牡丹園あり。

稱名寺。 野見堂の下、大字町尾にあり。眞言宗にして北條實時の本願、その子顯時の建立なり。寺域廣濶にして、堂後に實時父子の墳墓あり。金澤文庫はもと寺の境内にあり

て、建治中北條實時の創設にかゝり、和漢の書册數千卷を藏せしが、その後全く荒廢に歸し、近年再び復興を謀れりとぞ。

鎌倉と江ノ島

（附逗子方面）

鎌倉は、最近別莊地として榮えてゐた。夫れが大正十二年九月一日の地震で、根底から破壞されてしまつた。歴史上の舊蹟も大分いたんだ。けれ共、目下日毎に復興せられつゝある。震災後の鎌倉探勝も意義頗る深きものがある。

一、地理

鎌倉（相模國鎌倉郡）は、今日鎌倉町と云はれる。横須賀へ七哩大船へ三哩、東京驛へ三十一哩。東西北の三面は、松樹多き峰巒で圍まれ南の一面のみ海に面して居る。（由比ケ濱）田宅は皆海濱の平地と、峽谷間の坦地を開いたもので、主要の溪流は、滑川と水無瀬

川の二つである。共に鎌倉の美感ではあるが、經濟上何等の價値が無い、面積大約一方里半であるが、山谷共大半を占めて居る。

今是を區分して、

雪之下、小町、大町、西御門、二階堂、淨妙寺、十二所峠、扇が谷、長谷、坂之下、亂橋、材木座の十二の字に分けて居る。往昔鎌倉七郷と云ふは、沼濱、鎌倉、埼立、荏草、梶原、尺度、大島を云つたので、鎌倉本部の中にあるは、僅かに鎌倉と荏草の二つのみである。

鎌倉は、山ふところにあるのだが、仔細に見れば、以上述べた各地が夫れ〳〵山ふところにあつて、數多の谷々から出來て居るのである。(谷をヤツと云ふ)坂之下、桑が谷、大佛の谷、佐介が谷、法住寺が谷、無量寺が谷、扇が谷、二階堂が谷、葛西が谷、比企が谷、松葉が谷、名越が谷、辨が谷等谷が多い。かく三方山を以て圍まるゝが故に、他地方との交通上何れも山を越え切通を通つてゆくのである。世俗に云ふ鎌倉の七口(七切通)は是れで

ある。(今は、此他に二つの汽車のトンネルがある。)切通は、

極樂寺(腰越片瀬に通ず)大佛の切通假粧坂(藤澤に通ず)龜ヶ谷坂(山の内に通ず)

巨福呂坂(山之内より大船又は、藤澤に通ず)朝比奈(金澤に通ず)名越(三浦郡に通ず。)

是等切通の初開鑿の年月は詳かで無い。中には、頼朝の頃から既にあつたのもあらふが要するに、鎌倉繁盛時代に出來たものである。切通及び谷共に鎌倉の地形を物語るものである。三方山にかこまれ南が海に面する此地の氣候は、温暖で、避暑、避寒の好適地である。

二、歴史

鎌倉が歴史上著名となるのは、頼朝以來であるが、夫れ以前、此名は史上に現れて居る古事紀景行天皇の朝に、(日本武尊の皇子の名をあげて)「足鏡別王は鎌倉之別、小津、石代

之別、漁田之別の祖なり」とある。聖武天皇天平七年既に、鎌倉郡の名が見えて居る。(從四位下、高田王倉封、鎌倉郡鎌倉郷三十戸、田一百三十五町一百九畝)鎌倉の名の古き事が知られる。後三年の役に武勇を現した鎌倉權五郎景政は、此地の住人である。源頼義は石清水を勸請して、由比郷に八幡社を建立した。(今の鶴岡八幡)義家は、之れを小林郷に遷した、義朝も龜ヶ谷(壽福寺の所)に住居した事がある。源氏と由緒深き地である。頼朝がこの地を政治上の中心地とせし所以は、鎌倉の地形が天然の城郭なりし上、外郭として、箱根足柄、分陪が原の要地を有せし事一因なれど、源家との歴史的由緒に據る事又大である。

頼朝武家政治を始めて以來、鎌倉の繁華は年月と共に向上した。

宮柱ふとしき立てゝ萬世に
今ぞ榮えん鎌倉の里

と謳歌せられた。光行の海道記に、

「申の斜に、湯井濱に落着ぬ、しばらく休みて此所を見れば、數百艘の舟ども綱をくさりて大津の浦に似たり千萬宇の宅、軒をならべて、大淀のわたりに異ならず云々」

とある。人戸の如きは、正確に分らぬが、建長四年大約一萬戸はあつたと思ふ。商戸軒を並べ、神社佛閣を始めとして、武家屋敷迄整然として、政治經濟上の中心地たるに恥ぢ無かつたが、元弘三年北條氏滅亡と共に、荒廢してしまつた。足利氏が此地に關東管領をおくや鎌倉は稍復活したが、度々の兵火の爲めに廢頽して見る影も無くなつてしまつた。

徳川時代の荒廢は、そゞろ行人をして懐古の涙にくれしめた。嘗て繁華の地たりし鎌倉は漁村農村と化してしまつたのである。明治初年又然りである。近時海水浴の盛んなると共にさびれたる此地も繁華になり、復活の機運に向つた。諸人競うて別業を此地に營みしは、繁華になりゆく一因なれど、名所舊蹟の自から破壞せられんとするは、惜しむ可き事である。

備考　鎌倉と云ふ名稱の起りに就いては、

（A）神武帝東征の御時、毒矢にて東夷を射給ひ、數萬の賊徒を殺しゝが、其屍を埋めし所が鎌倉である。屍藏が鎌倉になりしとの說。（相模風土記）

（B）大職冠鎌足、鹿島參詣の途次、由井濱に泊し靈夢に感じ、年來持ちし鎌を大藏の松岡に生めし故鎌倉郡と云ふとの說。（詞林采葉抄）

（C）鎌倉のカマは竈の意にして、クラは谷の意なりとの說。

（D）鎌倉は、神倉（神庫）の意なりとの說。

とあるが、余は地形より論じて（C）の說に贊成する。（鎌倉の地形は竈に似て居る）

鎌倉の名勝古跡

鎌倉は、歷史的由緒に富んだ地であつて、桑園田圃、一木一石と雖も捨て難い。其中主要なる名勝古跡を、あげてみやう。

（A）第一方面

▲鶴岡八幡宮　國幣中社で、鎌倉第一の大社である。康平六年（後冷泉天皇）源賴義が石清水八幡を勸請した者である。始め由比鄕にあつたが、賴朝の時小林鄕の北山（大臣山）の麓に遷したが、建久二年の火災で類燒したので、後の山上に寶殿を造り、下ノ宮末社をも造營した。山上の社は卽ち今の鶴が岡八幡である。

八幡は、源氏の氏神と仰がれ、賴朝の信仰殊に篤かつたので、代々の將軍深く之れを尊信し歲首には將軍自ら儀衞を張つて參詣する例となり、除書を拜受し拜賀を行ふにも此社頭に於いてした。されば、武家庶民に至る迄一般に本社を尊信し、神封も次第に增加して、相模國の大社になつたのである。八幡宮の社前から由比濱に至る坦々たる大路を若宮大路と云ふ。（鳥居は三所にある）後足利氏も德川氏も之れを信仰したので、幸に荒廢を免れた。下宮に詣うで、六十二級の石階を上宮に詣ずるが順である。境內入口の反橋は赤橋と云ひ、（壽永年間架設）橋を渡つて左右の大池は、壽永元年に大庭景親等の掘たものである（昔は四　の島ありしが今は一つも無い）石段左の銀杏は、實朝の最後を語るものであ

る。多くの神寶中、螺鈿蒔太刀、菩薩面は見る可きである。八幡の傍らに師範學校がある。（生徒のストライキが名物である）

▲頼朝の墓　頼朝屋敷地、（今は三四町四方の畑）より進み大倉山の麓にある。（法華堂後の山）五輪塔だが古いものでは無い。東一町許りに、大江廣元、島津忠久の墓がある。

▲幕府跡　將軍の亭館、幕營の址は、今や其面影を留め無い。將軍の亭館は、三度移轉せられて居る。

（A）大藏（壽永四年より嘉祿元年迄四十六年間、今や田畑と化して居る）

（B）宇津宮辻（嘉祿元年より嘉禎二年迄十二年間、小町大路の中程であらふ）

（C）若宮大路（嘉禎二年から元弘三年迄九十八年間、土俗親王屋鋪と唱ふる所である）

▲荏柄天神　此神の勸請の年月、不詳だが、鎌倉幕府以前の古社である。（頼朝大藏邸鬼門の鎭護である）祭神は、菅公でめる、寶物は鎌倉宮に保管してある。享德四年今川範忠、成氏追討として、鎌倉に亂入せし時、菅公自畫の像を駿州に奪ひ去つたが、後還座したと

云ふ。

▲覺園寺　藥師堂が谷を、五六町進んだ所にある。鷲峯山眞言院と云ひ、本尊藥師は運慶作、（建保六年義時藥師堂を建つ）堂は建長三年火災にかゝり、後永仁四年北條貞時が一寺としたのである。消防連の信仰する黑地藏（火燒地藏）がある。

▲鎌倉宮　官幣中社、護良親王の靈を祀つたもので、明治二年の創建である。宮より東方理智光寺跡山上に護良親王の墓がある。

▲瑞泉寺　鎌倉宮の東、七八町にして、關東十刹の一瑞泉寺がある、足利基氏の建立夢窓國師の開山である。

▲大御堂谷　勝長壽院のあつた地である。（頼朝が義朝鎌田正清の首を葬つた所である）孫實朝、平政子の墳墓も此にあつたと云ふが今は詳かで無い。

▲杉本觀音堂　天平六年僧行基の創建と云はれ觀音の像が著名である。

▲犬懸谷　衣張山の西麓にあり上杉定朝の邸宅がある。

▲報國寺　宅間が谷にある、功臣山建忠報國寺と云ひ（臨濟派）尊氏の祖父家時の建立である。宅間法眼作の迦葉最も名高かつたが、近年火災に罹つて烏有に歸したは、惜しむ可きである。

▲淨妙寺　杉本觀音（天平六年行基の創建）の東二町許にある。稻荷山と號し、臨濟宗、鎌倉五山の一で文治四年足利義兼の草創である。（始め密宗後禪刹となる）足利義兼義氏の墓がある。

▲足利公方屋敷跡　淨妙寺東の芝生である。

▲明王院　五大堂と唱へ、賴經將軍の願所である。（飯盛山寛善寺）是より街道を進めば、朝比奈切通を通つて金澤に通ずる。

（是より字小町の名勝古跡にうつる）

（B）　第二方面

▲北條屋敷跡　元弘の役、兵火にかゝつたが、尊氏、北條氏追弔の爲め寺を建てゝ寶戒寺と云ふ。（寺室多し）此前の畑地が、若宮大路幕府跡である。宇都宮稻荷と稱する所が、宇都宮辻幕府跡である。

▲東勝寺跡　葛西が谷にある。（今は畑地）北條泰時の草創で、北條氏一門滅亡の地である。

▲妙本寺　比企谷にある。日蓮の俗弟子比企（大學三郎）の建立である。（もと比企能員邸宅）比企一門の墓がある。

▲安國寺　松葉が谷にある。日蓮の草創で、安國論は右方の巖窟で編述したと云はれる。是より名越切通を越えれば逗子に至る。

▲下若宮　辻町にある。（鶴岡八幡の故地で、賴義の勸請した所である）

▲補陀落寺　亂橋にある。開山は文覺上人である、寺寶に富んで居る。

▲光明寺　材木座にある。（補陀落寺の南隣）淨土宗關東總本山（天照山蓮華院）である。

始め經時(北條)佐介谷に建てたのであるが、(蓮華寺) 後今の地に移したのである。山門「天照山」の額は、後花園天皇の宸筆である。本堂方丈共に立派である、寺寶又多いのである是から海岸を傳うて逗子へ行ける、風景絶佳である。(巨襄坂を越えて、山之内の名勝古跡にうつる。

(C) 第三方面

▲大江季光墓　八幡宮の西鶯谷にある。季光は毛利氏の祖先で、廣元の子である。墓の當否は、不詳だが立派である、藩閥の力の大なるを語るものである。

▲巨襄坂　是を越ゆれば、建長寺前に出る。

▲荒居閻魔堂　圓應寺と云ひ建長寺の前である。(運慶作の閻魔がある)

▲建長寺　巨福山と號し、五山第一である、相模守平時頼の建立である、(建長三年)近年裏山の絶頂に、半僧坊を勸請し、毎月十七日を緣日として居る。金龍水(鎌倉五水之一)

山門は見る可きである、外門額の字は朝鮮人竹西の書である。寶物は八月頃蟲干を行ふ。

▲長壽寺　足利基氏開基と云はれる、尊氏の墓及び木像がある。

▲淨智寺　鎌倉五山第四である。(平師時建立)

▲明月院　(淨智寺より明月院に至る道の右手の畑を上杉管領屋舗跡と云ふ)上杉憲方の開基である。憲方は應永元年に逝去した。

▲東慶寺　圓覺寺の南にある。臨濟宗の尼寺で松岡と號す。開山覺山尼(北條時宗の室)である。此寺には婦人をして夫と緣を切らしむる權力がある。(二十四ヶ月此寺に居る時は)後醍醐帝皇女用堂、豐臣秀頼の女天秀の墓がある。

▲圓覺寺　鎌倉五山の第二で、弘安中時宗の建立である。(瑞鹿山) 佛門の額(瑞鹿山) 佛殿の額(大光明寶殿)は後光嚴帝の宸筆である。佛日庵に時宗の墓がある。總門左右の池を白鷺池と云ふ。又最明寺跡は、鐵道の踏切を越えて右方二町許奥にある。

(長壽寺より龜が谷坂を通り扇ヶ谷方面に至る)

（D） 第四方面

▲海藏寺　扇谷山と稱し、開山は源翁律師である。境内に十六の井がある。

▲葛原岡神社　假粧坂の上にある、右少辨俊基卿を祀つたのである。もと其近傍の畑中に墓があつたのを明治二十一年新に社を建てゝ祀つたのである。（是より此道を進めば梶原村を經て藤澤に至るのである）

▲淨光明寺　泉谷にある。（泉谷山）建長三年、北條長時の建立である。冷泉爲相卿の墓がある。

▲英勝寺　東光寺山と號し、淨土宗の尼寺である。此地はもと太田道灌の舊跡で、水戸中納言賴房の母堂英勝院の開基である。（壽福寺の北隣）

▲壽福寺　龜が谷にある。（龜谷山金剛壽福禪寺）鎌倉五山の第三である。（源義朝の舊跡である）平政子の本願で、榮西を開山としてゐる。榮西も當寺で寂し、實朝も屢々參詣に

來て居る。此寺の後の山が源氏山である。

▲問註所跡　御用邸（停車場西）の筋向邊である。御用邸前南方に裁許橋と云ふがある。昔を語るものである。

▲和田塚　大町原にある。（和田一族を葬つた所である）

▲佐介稻荷　佐介谷にある、信仰頗る厚い。

▲稻瀨川　古へは水無瀨川とも云ふ。（水源は御輿岳である）萬葉集に、

まかなしみさねにわはゆく鎌倉の
水無能勢河に潮みつらんか

青砥藤綱の傳說で著名な滑川よりは、小流であるし又、文學地理上の價値も少ない。

▲甘繩神社　御輿ヶ岳の麓。伊勢大神宮の別宮である。（古くは甘繩神宮）賴朝も屢々參詣した。

▲大佛　高德院の保管である。青銅三丈八尺の大佛で建長四年の鑄造である、（美術史上

研究すべきである）

▲長谷觀音　海光山新長谷寺と云ひ、坂東巡禮札所の第四で、光明寺末である。本堂の風景は絶佳である、本堂には、二丈六尺の十一面觀音がある。（元正天皇の時、德道上人、和州長谷の山中で大木を得、二對ノ觀音を造り、其一對を海中に投ぜしに十六年をへて、長井の海面にうかんだ、依つて德道を開山として寺を造つたとの傳說がある）

▲御靈社　鎌倉權五郎景政の靈を祀る傳說に富んだ社である。

▲星月夜　文藝地理、謠曲地理上の舊跡である。極樂寺切通にかゝらんとする右端にある。昔は此井に晝も星が見えたが、奴婢、過つて菜刀を井中に落すや星の影見えなくなつたのであると云ふ。

▲稻村ヶ崎　西境の山脈の延びて海に逼つた所で絶壁である。（東端を靈山ヶ崎西方を稻村ヶ崎と云ふ）昔は、此岬角の下に道があつたのである。新田義貞の鎌倉入りは、茲を利用したので、鎌倉防備上の弱點である。

▲極樂寺　極樂寺坂の下にある。（眞言律宗、靈鷲感應院と云ひ奈良西大寺末）北條重時の建立（重時の法名極樂寺と云ふ）昔は、四十九院あつたが、今は一院のみ、開山の忍性は仁者で、病者をあはれんだ、元亨釋書に、曰く、

「桑が谷の療病所には、二十歲の間癒ゆる者四萬六千八百人、死する者一萬四百五十人、已にして治するもの四の五をこえたり」

と忍性こそ、眞の慈善家なれ。

▲七里ヶ濱　稻村崎より、腰越に至る海岸で、日蓮赦免に關して著名な行合川がある。海岸風景絶佳。唯肺病患者多きをうらみとする。（龍口の變の時、奇瑞多きを知らせる使と日蓮赦免の使と行合つた所である）

五　山　建長寺、圓覺寺、壽福寺、淨智寺、淨妙寺。

五名水　日蓮同水、梶原太刀洗水、錢洗水、金龍水、甘露水。

十　井　六角の井、銚子の井、星の井、鐵の井、棟立の井、瓶の井、泉の井、扇の井

底脱の井。

十　橋　亂橋、逆川橋、延命寺橋、琵琶橋、夷堂橋、筋違橋、歌の橋、勝の橋、十王堂橋、裁許橋。

鎌倉近傍名所舊蹟

（一）片瀬、江の島方面

▲小動　七里ヶ濱を進み、腰越に入る。左の巖山を云ふ山上に八王子宮あり、風光絶佳。

▲滿福寺　古へ京、鎌倉の本街道、義經が腰越狀を認めた所と云ふ。（開山行基、寺に傳ふる腰越狀は、眞義不詳）

▲龍口寺　日蓮、刑に處せられ特免せられし所である。弘安杜頃六考僧が力を合せて創立したものである。九月十一、十二日が御會式である。蒙古使者杜世忠の殺されしも此邊である。片瀬マンヂューは名産である。

▲片瀬川　境川とも田倉川とも云ひ、川口稍、大である。大庭景親の處刑されし所である。

▲江の島　繪ノ島とも書く鎌倉より二里、陸岸を距る十一町、橋を架し、島の高さ二四二呎、（潮引けば歩行す）

昔は必らず船で交通したが、建保四年大海忽ち道路に變じ、參詣の客引きも切らずとあるが、地形は變化がある。昔、惡龍住み、人を害せしが、欽明天皇十三年、海上忽ち孤島を湧出し、天女降りて、惡龍を隨へたと緣起にあるが牽强である。壽永元年、賴朝の本願として、文學上人が辨天を勸請したに始まる。江ノ島神社は、下の宮、上の宮、本の宮三社あつて何れも、縣社である。（宗形三女神を祀る）貝細工、螺鈿の壺燒が名產である。

▲兒が淵　本の宮を下りゆけば、斷崖の下、白浪のさわぐ所がそれである。兒白菊の投身した所である。辭世の句に、

白菊としのぶの里の人問はゞ

思ひ入江の島と答へよ

▲龍窟　魚板岩より假橋を渡つて大岩窟に入る。穴は分れて、二つとなり（胎藏界金剛界）奥に石佛がある。此で云ふ傳說は言ふに足らぬ。總じて江之島は、俗氣紛々たる所である。

▲鵠沼　片瀨を距十餘町。（引地川と片瀨川の間）風景よく避暑避寒の客多し。

▲田谷の窟　大船驛の北半里、定泉寺の後園にある、窟の長三町、（里人佐藤某靈夢に感じて開鑿せり）

▲藤澤淸淨光寺　時宗の總本山、藤澤道場と云ひ、足利時代には盛んであつた、（開山呑海は遊行四世の僧で、一遍駐錫の地は、當麻無量光寺である）小栗判官と遊女照手姫の話しがある。驛より六七町。

（二）　逗子葉山方面

▲逗子　（鎌倉八幡前より一里）今、田越村と云ひ、櫻山附近迄も含めて逗子（古書に豆師）と云ふて居る。逗子より葉山へかけて、東都紳士の別莊多く、天然の風景は、自ら俗化しつゝある。

鎌倉逗子の間の小坪の海岸（材木座の飯島崎の南）の景は絶佳である。小坂太郎の由緒を語る小坂天王祠は、僅かに石祠を殘すのみ、此間に鐘乳洞がある。

▲六代詞　三崎街道を進み、田越川を渡り左にある。六代は維盛の嫡男で此地で殺された。

▲新宿濱　驛より六町。海水浴場である。

▲鐙摺　六代墓を見て、猶三崎街道を進めば、日陰の茶屋に至る。此邊を鐙摺と云ふ。頼朝、三崎遊覽の時、道狹く鐙がすれ合つたが故名づけたと云ふ。

▲森戸明神　葉山に至り、森戸橋を渡り數町にして右側に森戸明神がある。古くは杜戸とも書く。葉山鄕の總鎭守である。（源家の將軍は、暫々杜戸に遊び給ふた）

▲葉山御用邸　驛を距る一里餘、此邊の風光は絶佳で長者が崎の眺め天の妙を極めて居る、此附近、皇族、華族の別莊に富んで居る。

▲岩殿觀音　葉山より、逗子驛に歸つて行くが道順である。(久野谷村にある)行基の開基で、坂東二番の札所である。

▲神武寺　沼間にある、醫王山來迎院と云ひ、天臺宗である、行基の開基、慈覺の中興である。境内は一石山で石を切りぬいて、堂宇がある、險路五町にして達する。

鎌倉及其附近案内

鎌倉を一見せんとする人は、西より來る人は、藤澤で下車し、東京よりする人は、鎌倉で下車するを可とする。東京驛より三十一哩(賃錢は、三等八十九錢、鎌倉江ノ島廻遊乘車券を買ふのが一番便利である。三等一圓九十二錢、二等三圓六十錢である。電車賃も含まつてゐる)鎌倉見物は驛を中心とするが、便利である。驛より各名所への距離は、

八幡宮	五町三十間
大塔宮	十七間
圓覺寺	二十三町
壽福寺	十町
光明寺	十八町
長谷觀音	十八町
七里濱	三十二町
鎌倉藤澤	十四町三十間
建長寺	十四町
十六ノ井	十七町三十間
由井濱	十一町
大佛	二十町
權五郎社	二十町
江之島	二里十一町

鎌倉藤澤の間は、電氣鐵道で連絡せらて居る。(江之島電氣鐵道)長谷迄五錢、江之島まで十七錢、藤澤迄二十五錢である。團體に對しては、割引ある事勿論である。學生三十名以上は、普通賃金の半額である。普通團體も三十名以上から割引がある。又、名所廻遊馬車もあつて、五人乘一臺二圓五十錢、人力車七十五錢である。見物機關は備つて居るが、壯健の人は、徒歩の方が、趣味深いのである。又案内者を雇ふ事も出來る。

一日、金一圓二十錢、半日六十錢、鎌倉江之島廻り二圓寶物拜觀料は、五十錢で充分である。

遊覽の便宜は、備つて居る。

旅館としては、三橋、小町園、角正、松岡、海月樓が著名である、宿泊料は、五圓五十錢から二圓五十錢迄であるが、學生なら二圓内外で泊まれる。

名產としては、鎌倉彫、鎌倉燒、武者煎餅、等がある。近時、鎌倉は、避暑避寒の好適地と目された結果、著しく俗化した、特に。夏の鎌倉は、最も雜風景である。海水浴は由井濱で出來る。鎌倉を訪うて、懷古の思ひにふけり得るは、冬のみである、特に最近肺病患者の避難所となつた結果此地の滯在は、最も危險である。

鎌倉見物に要する時間並びに見物の順序を究めておく、鎌倉を學問的に研究しようとする人には、少なくも一週間の滯在を要する。然らずんば、一通りの研究は覺束無いのである。然し鎌倉を訪ふ多くの人は、左程迄研究の必要は無いのである。一日の遊覽を試むれ

ば足りるのである。

專門に此地を研究せんとする人は、基礎的智識として、少なくも

吉田博士　大日本地名辭書

大森學士　かまくら

横井春野　矢津昌永　歷史的日本地理

横井時冬博士　大日本繪畫史

歷史地理學會　鎌倉時代史論

を一讀す可きである。是を一日にして、見物す可き順路は（東京驛癸一番列車に乘じて、鎌倉に至り、夕刻歸京の豫定にて）

◎鎌倉驛、—八幡通若宮小路—二の鳥居前右折—小町通左折—北條屋敷跡、—寶戒寺—筋違橋賴朝屋敷跡—附近滑川—賴朝、大江、島津の墓—鎌倉の宮—鶴岡八幡宮—同境內左裏門より右巨福呂坂切通し—建長寺—圓覺寺—最明寺—引返し亀ヶ谷切通—扇ヶ谷

右折、鐵道レールを越え—化粧坂(景清土牢)—海藏寺—引返し英勝寺、壽福寺、實朝、政子の墓、—正安屋敷—御用邸前、由井濱通長谷通り—長谷觀音—觀音手前右折—長谷大佛—鎌倉權五郎社(御靈社)—星月夜—極樂寺坂—極樂寺—左折稻村ヶ崎—七里濱—行合橋—腰越—片瀨—江ノ島藤澤驛

(藤澤驛と鎌倉驛は共に、東京驛から三十一哩で賃金も同じである)

猶、壯健の人は、

○鎌倉驛—右折八幡宮通り—一の鳥居、一由井濱—左折—材木座—右折、光明寺引返して比企ヶ谷—妙本寺—本覺寺—小町通りへ引戻つて、前項の順に廻るも一法である。

是れに要する時間は、人々各々違ふが、江ノ島藤澤間を電車に乘る他は全部徒歩で、九時間で充分である。況んや自動車又は、人力車を利用するに於いては、易々たりである。逆に藤澤よりするも、結局同じ事である。(見物の箇所は、猶簡單にする事が出來る)

場合に依れば、大船驛で下車して、鎌倉に入り、江ノ島から藤澤へ行くも一法である。

(大船より鎌倉驛迄は一里十六町である)

猶簡略に見るには、

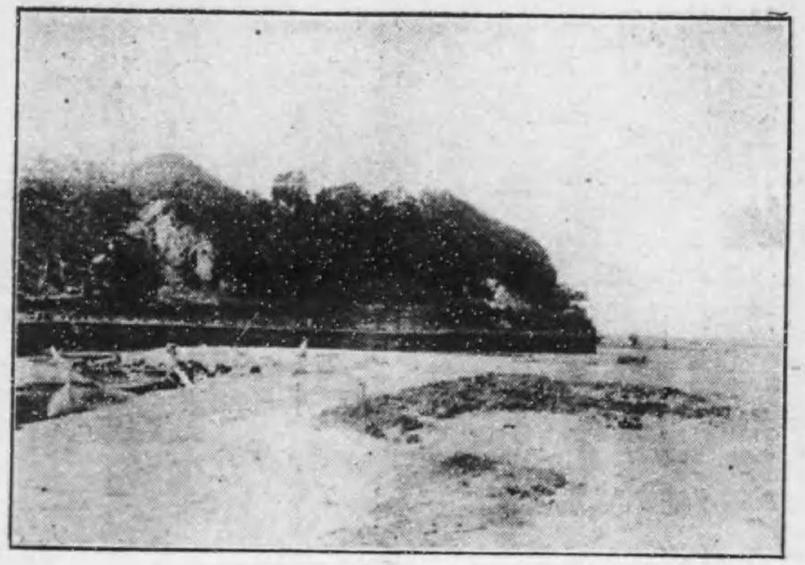
鎌倉驛—鶴岡—頼朝、大江、島津墓—鎌倉宮—光明寺—由井濱、—長谷大佛—觀音—星月夜—極樂寺—七里濱—江之島—藤澤

(大船—圓覺寺—最明寺—建長寺—鶴岡と云ふ順でよい)

でも、一通りの見物である。(小學校の遠足等は、是れで充分である)

江之島方面

江ノ島は、藤澤驛から一里、片瀨迄電車賃八錢、鎌倉片瀨間十七錢、旅館は、惠比壽屋岩本、金龜樓、讃岐屋が著名で二圓から五圓までゞ宿泊出來る。此方面の見物は、鎌倉と結びつけて一日に出來る、又海水浴場鵠沼は藤澤より二十五町、電車賃七錢、旅館は、東屋、中家館、待潮館、三井樓等で三圓から五圓迄で宿泊出來る。



逗子鳴鶴ヶ崎

逗子葉山方面

逗子驛より海水浴場西南十二町

六代御前墓南十町

森戸神社南三十町

葉山海水浴場南三十町

驛から逗子海水浴迄人力車賃十五錢馬車八錢、自働車十五錢である。

森戸の海水浴は、驛から三十三町ある。驛より長者が崎迄乘合自働車がある。自働車一日貸切は三十五圓、一時間(六人乘)は四圓である。此驛から神武寺(東北一里、自働車一人乘一圓五十錢)金澤八景

(東北三里)にゆく事が出來る。旅館は、(逗子)養神亭、松屋(葉山)日蔭茶屋、長者園、かぎや等で三圓から泊まれる。

金澤方面

金澤へは、鎌倉からも行く事が出來る。鶴が岡から、一時間半で達する。峠を越すので交通機關は無い。如何しても徒歩で行く可きである。峠は、水も豐富だし、茶屋もあるから、老人と雖も心配は無用である。鎌倉本部の見物を終へて、金澤に出で、田浦か逗子驛へ出るのは面白い。又壯健な人ならば、金澤へ出て、横濱街道を進み、横濱へ出るも一興である。金澤横濱は半日程である。又單に金澤八景を訪ふなら、田浦驛で下車するが最も便利である。田浦から一里三十町、船一艘雇つて、八十五錢である。

旅館としては、千代本、野島館、吾妻屋が主で、三圓内外で泊まり得るのである。

旅行案

學生に對し鎌倉見物以外に、鎌倉を中心として、附近の名勝古跡を尋ぬる旅行案内を記載する。何れも、余が少年教育機關として設けし元祿會旅行部で實行した所で、日歸りを眼目として居る。

(A)案、大船より鎌倉に入り、鎌倉見物をすませ江ノ島より藤澤に出で歸京する案。

(B)案、鎌倉の大部を見物し、朝比奈切通しを越え、金澤八景に至り、稱名寺を見て逗子又は田浦に至り歸京する案。

(C)案、金澤八景を見物し、横濱に出で、歸京する案。是れも一日でゆつくりである。

(D)案、品川を起點とし横濱に出で杉田、金澤をへて、鎌倉江之島迄夜行する案、夜行軍は、精神修養、體力養成には、最も効果あると信ずる、(歸りは汽車を利用する)品川を夜八時に出て、江之島へ翌朝九時には着ける、修學の目的を果たす爲め、名勝古

跡を見物しても、午後二時頃には江之島に着ける。(神奈川より東海道を進み、大船より鎌倉に入るも一方法である。)

(E)三浦三崎横須賀案、東京を一番列車で發し、鎌倉にて下車し、主なる所(鶴岡八幡宮、鎌倉宮、長谷觀音、由井濱、光明寺)を見物し、材木座より海岸に沿ひ(山を越えて)逗子に出で、三崎街道を進み途中、小網代、油壺の奇景を探り、三崎に出で、午後十一時の汽船に乘れば翌朝五時に東京靈岸島に着く事が出來る。學生は、日曜に出かければ、月曜日に缺席しなくてすむのである。又は三崎より浦賀に出で、横須賀より汽車にて歸京する案)

費用は、四圓五十錢で充分である。特に夜行案の如きは、一圓五十錢で充分である、學生諸氏の活動を望む、

鎌倉のよるの山おろし寒ければ
みなのせ川に千鳥なくなり

加茂眞淵

三浦の長井

逗子葉山は、貴族の横行する場所である。之れに反して長井は、平民の避暑地である。逗子からゆくとすれば、ブラ〳〵と歩いて、三浦半島西海岸の風光を賞美することを忘れてはならない。横須賀からゆけば、驛前から、三崎行きの自働車で僅か三十分でゆくことが出來る。(自働車賃一圓二十錢) 長井の濱は長汀曲浦約一里、風光絶佳、海水は飽く迄清くしかも遠淺である。盛夏日中に於いて、八十三度以上に昇ることは稀れであると云ふ位に涼しい。旅館は、田中屋、富士屋、高橋屋、長井館等で、一圓五十錢内外で泊めてくれる。

平民にとつて、夏は絶好の避暑地であり、冬は、避寒地である。私は、この地の人々の素朴なのが何よりも嬉しい。

小網代、油壺

逗子の方からゆけば、三崎より半道ばかり前にある一小灣が油壺である。三方丘陵であるので、能く風を防ぎ灣内波靜かで、水は樹陰をうつして、暗碧色を帶んでゐる。小網代も、西を除いて三方斷崖で取り圍まれた小さい港である。小網代と油壺とを境する岬角が名にしおふ荒井城址である。永正の昔荒井城主三浦道寸、荒次郎父子が、北條早雲の大軍と戰ふこと三年の後、矢盡き弓折れて、城を枕に討死した所である。城址から相模灘の荒波を隔てゝ伊豆半島を眺めた風光は、絶佳である。又此地に、帝國大學臨海實驗所がある。

三浦の三崎

三浦半島の南端に位し、城ヶ島を前に控へてゐる。(三崎から城ヶ島迄四町。島は幅四町

長さ一里に足らぬ小島であるが、島中に燈臺がある。）

漁港としての價値も大である。逗子及び横須賀から約六里、逗子より乘合馬車で二時間半（一圓四十錢）又自働車で一時間（約九圓）横須賀から、馬車で二時間（一圓）自働車で一時間（三圓見當）である。東京靈岸島から汽船で六時間（急行便四時間）、賃金は僅かに一圓である。

避暑避寒地としては、絶好の地である。町内三浦黨の遺跡多く、櫻ノ御所、椿ノ御所、桃ノ御所などは、今は名のみにすぎないが、懷古の情をそゝる。町より一里强、松輪崎の燈臺は一見の價値大である。旅館は三崎館、青柳亭、紀ノ國屋、船本屋等で、一泊二圓五十錢から五圓迄である。中食は其半額である。間貸をする家もある。夏季で疊一疊で一圓二十錢見當である。

この地は、地震の結果四尺位土地は隆起したとのことであるが、地盤宜しき爲めか、震災の被害は極めて少なかつた。

何處へいつても海岸は、魚類が豐富であるが、とりわけ三崎は魚類が豐かである。漁獵を目的とする發動機船の根據地は三崎である。

浦賀と久里濱

横須賀の南二里、近世幕府こゝに奉行廳をおき、江戸入津の船舶を監視した。今浦賀ドック會社がある。横須賀迄自働車で三十分五十錢）旅館は、野木屋、德田屋。

浦賀から三崎街道を進むこと二十町、本道から少し入つた所に、久里濱がある。ペリーが上陸した地で記念碑がある。浦賀港を大觀するには、愛宕山へ登るに限る。愛宕山は又梅の名所である。

觀音崎

浦賀から約二十町。海軍の要塞地で、三海里を隔てゝ、房州の富津に相對してゐる。崎

端に盤臺がある。海拔百七十八尺である。觀音崎は古くは佛崎と云はれた。觀音堂あるが故に、觀音崎の名稱が起つたのである。

觀音崎の西北側に、走水神社がある。日本武尊が、東夷征討のみぎり、上總へとてこの海をわたらせ給ふたのである。

衣笠の櫻

浦賀の西南一里半。横須賀より一里。累世三浦氏が、根據とした城で、三浦氏は、治承四年の夏、畠山重忠の爲めに破られた、今では、櫻の名所として知られてゐる。

横須賀

横須賀は、近世迄微々たる海村であつたが、文久年間幕府此地に造船廠を建て、明治維新後、軍港と決して以來一大都邑となつたのである。港は、內港外港の二つに分れ、內港

は軍港となり、外港に市街がある。軍艦見物は、金曜日に限られてゐる。

郊外の史蹟云ふ。

造船所の沿革。

幕府が此地に造船所を建設したのは、元治元年に（五十數年前）永井岩之丞の建議により佛國公使レオン、ロセスと謀り、時の外國奉行柴田日向守を佛國に派し、技師を庸聘して、慶應二年三月に起工した。尤も中途で幕府が倒れたので、その後明治政府が工を繼ぎ、四年一月になつて竣工した。卽今の第一船渠である。此が日本のみならず東洋の造船所の初めである。因に、今の第二船渠は、同十三年七月起工して、同十七年七月竣功し第三は同四年六月に出來したものである。

【鎭守府】 明治五年に提督府が此地に設けられ、間もなく廢せられて海軍省內に移り、九年に提督府が廢せられて九月横濱に東海鎭守府が開かれた。それが十七年十二月に此地に移された。當時は日本唯一の鎭守府であつたのであるが、十九年に吳、佐世保に、

二十二年に更に舞鶴に設けまた室蘭にも置く事となつた。けれども室蘭の方は三十六年に廢止する事に決した。日露の役後旅順に設けられたが、近年廢止されて、鎭海灣に設置さるゝ事となつた。鎭守府の外に竹敷、馬公、大湊に要港を置いて、鎭守府と共に管轄區を定めて、帝國の領海、沿岸の防備に當て居る。當鎭守府の管轄區は、羽後陸奥の國境から、本土の太平洋海岸、紀伊國南牟婁、東牟婁の郡界に至る間の海岸及び小笠原島、北海道、樺太の海岸である。

【日本の海軍】 日本は、四面環海の國だから、太古からして海事思想は大に發達して居た。神話中にも、素盞嗚尊の御渡韓の如き、外國との交通の例は多く見うけられる。爾後人皇の御代となつても、海事思想は彌々發達して、日本の文明が次第に發展したのは全くこの賜である。然し、此等の渡航は多く平和的のものだから、日本海軍の發達の根本精神とはなるが、直接の關係は少い。其直接關係は鎌倉時代の元寇から南北朝時代に益々盛となつた倭寇にある。それが足利の戰亂となると、沿岸の諸雄は海軍を編成して侵略

防備の策を講じた。それには倭寇の分子が餘程多く含まれて居る。天下が一度治まつて秀吉の征韓の際には、堂々と日本海軍が編成された。それが德川時代となると、平和的交通は益々盛になつたが、武裝した海軍はあまり必要がなくなつた。加之かの寛永の鎖國政策實施以來は、平和的交通も止められて、全然海外への發展を沮止されて、大船を造る事すら禁ぜられた。さうして海軍の如きは全く其存在も認められなかつた。所が幕末になつて外國人から鎖國の夢を破られんとすること度々に及び、遂に安政元年には開國の止むなきに至つた。そこで、幕府でも急に海軍の必要に迫られ、軍艦を外國から買ひ入れ、一方又國內でも造り始めた。幕府のみならず、各藩でも海軍の設備を整へ、薩摩藩の如きは軍艦を十七隻も所有するに至つた。それで幕府は安政二年に海軍操縱の研究所として、蘭人を師として海軍傳習所を長崎に設けた。四年に東京築地に移つて、傳習生が教師となつて海員の教育に從事した。又安政二年には、長崎の稻佐に製鐵所を設け、文久元年に竣工して造船業を助けた。これが今の三菱造船所の前身である。

かく幕府では軍艦製造海員養成の法を講ずると同時に、文久二年軍制取調掛を設け、艦隊を編して全國を六區に分けて、警備の任に當らしめ、又、品川灣には砲臺を築き、沿海を測量し、燈臺を設ける等、着々海軍擴張の事に奔走した。此等の幕府の海軍は初めは和蘭式、次に佛式であつたが、慶應三年九月から英國式に改められた。

次で、明治政府となると、元年に海軍總督、二年に兵部省、四年に海軍々務局、五年二月に海軍省設立となり、渉岸防禦についても、次第に變遷があつて以て今日に及んだ。

（横須賀の鎮守府の項參照）

今明治年代から日本海軍の發達を軍艦の噸數で表示して見やう。

明治四年	六千噸
同十三年	二萬七千噸
同廿七年（日清役前）	六萬餘噸
同廿九年（同　後）	十萬餘噸

同卅七年（日露役前）	二十六萬噸
大正四年	七十七萬噸餘

ウイリアム、アダムスこと、三浦安針の墓は、横須賀驛の西半里餘の丘上にある。アダムスは英人で、和蘭の船に乘つてゐたが、豐後の沖で難船し、救けられて江戸に召され、家康に仕へて、日本に歸化した。今日本橋區にある安針町は、アダムスの邸宅のあつた地である。彼れは、相模國三浦郡逸見に領地を賜つた。家康の命に依り、三浦安針と名乘つたのである。又海軍飛行機練習所たる追濱は、横須賀と田浦の間にある、横須賀市の旅館としては、龜屋、吾妻屋、三富屋等が一流である。

三浦半島一週案

第一日……逗子迄汽車でゆく。逗子から、葉山、長井、油壺などをへて、三崎に至りて一泊。ブラ〳〵と歩いて、ゆつくりと風光を賞美する。

第二日……三崎から浦賀に出て、横須賀に至り、汽車にて歸京する。

この案でゆけば、ザット三浦半島を一週した事になる。

逗子又は、横須賀から、三崎に至り、三崎から夜行汽船に乘れば、翌朝早く靈岸島につく。

藤澤の遊行寺

東海道本線藤澤驛下車（東京驛より八十一錢、以下何れも東京驛を基本として、計算する）驛の北八町。清淨光寺と云ひ、時宗の本山である。世間では、遊行寺の名を呼び、清淨光寺の名を知らぬ者が多い。開祖は遊行上人一遍から四世に當る呑海和尚である。境內には小栗堂とて小栗判官滿重を祀つた堂と、寺寶としては、判官の愛馬や、照手姫所用の鏡がある。

辻　堂

辻堂驛（八十五錢）は近年新設せられた驛である。海岸は一帶の松林、左りに近く江ノ島、右に遠く伊豆半島を眺め風光絕佳である。マダ旅館の設備はないが、間借して自炊生活をするには、最も適してゐる。平民黨のゆく可き所である。

茅ケ崎

東京驛より茅ケ崎迄一時間半（九十四錢）昔は一魚村であつたが、今日立派な別莊地となつた。こゝから、平塚へかけて、肺病患者の多いことは一大缺點である。海水浴場は驛の南八町である。又卷綱で有名な柳島は、驛より約十五町である。驛の西北一里半に應神天皇を祀つた國幣中社たる寒川神社がある。昔は相州の一ノ宮と稱し、源氏及び北條氏の崇敬厚かつた。一ノ華居より本社迄八町、幽邃の境である。

平塚海岸

平塚も、茅ケ崎大磯などゝ共に保養地である。海水浴場は、平塚驛（一圓〇一錢）より約七町。相模川（この邊では馬入川）は、驛の東十町、旅館は、竹ノ屋、養生館、松本樓で、宿泊料は二圓五十錢、乃至四圓である。平塚は又大山阿夫利神社へゆく出發點である。

大山（阿夫利神社）

驛を距る北西四里半。山は海拔四千百三十尺。阿夫利山とも云ひ、山頂に阿夫利神社がある。大山祇命を祀つてある。維新前は、佛に歸し、坊舍十八院あつたが、今は、神社に歸し、縣社に列せられてゐる。今も、信徒の登山するもの頗る多い。特に四月一日から二十一日迄二十日間、七月二十日より八月十五日迄の二十一日間の祭禮の賑ひは大したもの

である。大山の奥の山々峯々は、所謂丹澤山塊で、一昨年の地震の震源地である。

大山登りの路はいろ〳〵あるが東京からゆくものは、大抵平塚からゆく。平塚から明神前迄三里半は馬車にのる。（七十錢）明神前から大山町迄二十町。大山町から頂上迄一里十町。（途中伊勢原迄乘合自動車七十錢）

歸りは、間道を通つて、道了權現へゆくとよい。この道は、頗る趣きがある。大山町には、こまや、いづや、平野家、武本樓、歡喜樓等旅館がある。宿泊料は一圓乃至三圓。

其他講中の泊まる御師の家が百餘軒ある。

相模峰のいづればあれと冬立てば
雨降山ぞまづ時雨ける

春海

名勝地誌云ふ。

「山頂に雨降神社あり。古へ石尊大權現と稱し、俗に大山不動と云ふ。祭神は大山祇命にして、神體は一箇の岩石なり。昔し日本武尊東夷征討のみぎり此岩に座し憩ひ給へ

り」

小余呂岐の濱

大磯

大磯（東京驛より一圓六錢）は、東京近傍屈指の保養地であるが、貴族的であるからして、平民には適しない。海水浴場は驛から二町。日本に於ける海水浴場の元祖であつて、サスガに設備はよい。この地で見る可きは、鴫立澤の鴫立庵及び虎子堂（西行法師が、心なき身にもあはれは知られけり、鴫立澤の秋の夕暮と詠じて以來、鴫立澤は、當國の歌枕となつた）虎子石（驛の東四丁、虎女は曾我祐成の相愛の女である。）高麗寺山（驛の東北十町。今高麗神

社がある。古へ高麗人の歸化したものゝ、移住地であつた）等である。大磯より小田原に至る海岸は、小綾の浦或は淘綾の磯と云はれ、風光絶佳である。

旅館は、招仙閣、濤龍館、長生館、角平等で、宿泊料は三圓乃至五圓。

國府津

この地も、今は別莊地となつてゐる。古へ國府の附近の港なりしが故に國府津の名が起つたのである。毎日、熱海、伊東方面へ汽船が出る。海岸は、波は荒いが、海水浴は出來る。旅館は、蔦屋、國府津館、綿屋、富士見屋、松濤園等で、宿泊料は三圓乃至五圓。

小田原

小田原（東京驛より一圓三十九錢）は、震災で全滅した。けれ共、非常な勢いで、復興を急いでをる。後北條氏の頃繁華の町となり、舊幕の頃には、街道の要驛として榮え、其

後東海道線の開通と共に一時衰へたが、近時頽勢をもり返して來た。保養地、海水浴場地としてよい。海岸は、御幸が濱と云ふ。小田原城址、報德神社（二宮尊德を祀る）小峰の梅林は見るべき所である。

又小田原より西南一里、石垣山城址をたずぬるもよい。

早川は、小田原と違つて、萬事輕便にゆくから、學生などの避暑に適する。

小田原記云ふ

去程に相州小田原守護の政道私なく民を撫せしかば、近國他國の人民、懷恩移家と津々浦々の町人、職人西國北國より群來ること、昔の鎌倉いかで是れ程あらんやと覺ゆる許りに見えにけり。東は一色より板橋に至る迄其の間一里程に棚をはり、賣買數を盡しける山海の珍物、琴碁、書畫の細工に至るまで不盡といふるなし。異國の唐物未だ目に不見おして聞も不及器物を幾等といふことなく積置たり。交易賣買の利潤は四條五條の辻にも過たり云々」と。また町の中央に外郎なる藥品を鬻ぐ家あり。これ、今を去ること

五百餘年前に一元人の歸化して傳へたるものにして、虎屋の透頂香とて古來名あり。明治三十五年この地に大海嘯來集して多く人家を奪へり。この地また海濱に海水浴場あり。

箱根

都人士にとつての樂園と云はれた箱根の諸温泉は、破壞せられた。山くずれ、道路の破壞は、歡樂境であつた箱根を、根柢から破壞した。けれ共、箱根びとは、一意千心復興を急いでをるからして、其復興は、蓋し割合に早いであらう。

遊園地箱根は、地文學上から云へば、二重式消火山で南北に長く東西に短く、印形をなせる外輪山と中央火口丘とからなつてゐる。火口原湖、火口原、池塘、溪流其間に交つてゐる。山中に、幾多の温泉がある。昔は七湯と云はれたが、今では、其倍になつて、十四湯を數へることが出來る。今でこそ消火山となつたが、火山としての規模の宏大なことは

阿蘇と共に、世界に冠たるものである。

外輪山
- 明神岳、明星山……東部
- 金時山、乙女峠……北部
- 長尾峠、三國峠……西部
- 鞍掛山、要害山……南部

中央火口丘
- 神山、駒ヶ岳
- 双子岳、冠岳

火口原湖……蘆ノ湖

火口原……仙石原、宮坂野、池尻

池塘……精進池、阿字池、薺池、野馬池

溪流……蛇骨川、須雲川、早川

硫氣噴孔……小涌谷、早雲地獄、硫黄山、湯ノ花澤

水蒸氣噴水……小涌谷

炭酸噴氣孔の遺跡…上双子山の西北麓

又鑛泉としては左の種類がある。

單純泉……湯本、堂ヶ島

鹽類泉……底倉、宮下、木賀、塔ノ澤

酸性泉……上下仙石、姥子、强羅、小涌谷

硫黄泉……蘆ノ湯、湯ノ花澤

炭酸冷水……大海谷、阿字池東北岸

古來、湯本、塔ノ澤、堂ヶ島、宮ノ下、底倉、木賀、蘆ノ湯を七湯と稱す。

德川氏は、箱根に關所を設けて、江戸のかためとした。中世以降箱根山以東を關東、阪東と稱し、關八州の名が起つた。(古くは、逢坂山以東を關東と云ふたのである)中世には、東八ヶ國の名もあつた。東海道の官道としての箱根路にもいろ〳〵變遷はあつたが、官道

としては、足柄路の方が古いのである。

東京から、箱根へ遊ばふとするには、先づ東京驛から小田原迄汽車でゆく。(一圓三十九錢、二時間二十分を要する)小田原から湯本迄電車でゆく。(二十五錢約三十分)湯本から強羅迄登山電車があつたのだが、震災の爲めに線路が破壞せられてしまつた。之れは一寸快復が困難らしい。けれ共、小田原からでも、湯本からでも、自働車で各温泉地へゆくことが出來る。(最近強羅迄の登山電車は開通した)

湯本より各地への自働車賃金表

區間	小田原電氣會社 片道	小田原電氣會社 往復	富士屋ホテル 片道	富士屋ホテル 往復	MF商會 片道	MF商會 往復
國府津	六、〇〇	九、〇〇	六、〇〇	九、〇〇	六、〇〇	一〇、〇〇
酒勾	四、五〇	七、〇〇	五、〇〇	七、五〇	四、五〇	七、〇〇
小田原	三、〇〇	五、〇〇	三、〇〇	五、〇〇	三、〇〇	五、〇〇

塔ノ澤	一、〇〇	二、〇〇	一、〇〇	二、〇〇	一、〇〇	一、五〇
大平臺	三、〇〇	五、〇〇	三、〇〇	五、〇〇		
宮ノ下底倉	四、〇〇	六、〇〇	六、〇〇	六、〇〇	四、〇〇	六、〇〇
小海谷	六、〇〇	九、〇〇	六、〇〇	九、〇〇	六、〇〇	九、〇〇
蘆ノ湯	九、〇〇	一三、〇〇	九、〇〇	一三、〇〇	九、〇〇	一三、〇〇
箱根町	一三、〇〇	一九、〇〇	一三、〇〇	一九、〇〇	一二、〇〇	一八、〇〇
木賀宮城野	五、〇〇	七、〇〇	五、〇〇	七、〇〇	五、〇〇	七、〇〇
强羅	六、五〇	九、五〇	六、五〇	九、五〇	六、五〇	九、五〇
仙石	九、〇〇	一三、〇〇	八、〇〇	一二、〇〇	八、〇〇	一二、〇〇
長尾峠	一六、〇〇	二二、五〇	一五、〇〇	二二、〇〇		
御殿場	二六、〇〇	三六、五〇	二七、〇〇	三七、〇〇		

◎割增金　雨雪の日及夜間は二割增▲供待最初の二十分は無料にして其以上は二十

分を増す毎に金五十錢但富士屋ホテルは壹圓尚詳細は各營業者に於て異なれば御乘車の際御注意を乞ふ。

人力車、駕籠等の便もある。

一、湯本より宮ノ下迄

イ、湯本

海拔三百四十三尺。箱根温泉の入口である。單純泉で、旅館は、福住、小川、住吉等で貴族的である。腦病、神經諸病、リューマチス、婦人病、胃病に効がある。玉簾瀧（須雲川の上流入園料は夏季十錢冬季五錢）早雲寺（北條氏五世墳墓の地。）は見るべき所ぞかし。

ロ、塔ノ澤

海拔四百二十五尺、鹽類泉。腦病、神經諸病、リューマチス、婦人病、皮膚病、胃病に

効がある。旅館は、新玉の湯、鈴木、一ノ湯、福住櫻等である。見る可きは、阿彌陀寺（塔ノ峰にあり、天竺渡來の佛舍利を安置す）霧の瀧である。

ハ、宮ノ下

箱根十四湯の中心。海拔千百二十三尺。鹽類泉、旅館は、奈良屋、富士屋ホテル、龍雲館等である。風光絶佳の淺間山へ登るは一興。

ニ、堂ケ島

宮ノ下の富士屋ホテル下前を五町程下つて溪谷の中にある。泉質單純泉、近江屋、大和屋は氣持のよい家である。夢窓國師閑居の跡、白糸ノ瀧、調の瀧、葉陰の瀧は一見すべき所ぞかし。

ホ、底倉

海拔千百六十九尺、蛇骨川を挾んで感じのよい浴場である。鹽類泉、蔦屋、梅屋、仙石屋の中、蔦屋は特に著名である。太閤石風呂（天正十八年、小田原征伐の時、太閤秀吉

はこゝに石風呂をきづいて、將卒の勞を慰めた。）新田義隆朝臣の碑、蔦屋高山園は是非とも一見しなければならぬ。

ヘ、木賀

海拔千七十尺。泉質は鹽類泉。三松亭、龜屋、宮内等が有名である。白糸ノ瀧は一見の價値がある。

木賀より早川に沿ふて、新道を進むこと六七町にして、早川に跨つて宮城野村がある。こゝで、乙女峠道と道了權現道と左右に岐れる。又强羅に至る道がある。

ホ、小涌谷

宮ノ下より二十三町。海拔二千尺、酸性泉で、貧血性、腦病、胃病、神經病、脚氣、リューマチス、婦人病に特効がある。箱根十四湯中最も眺望のすぐれた所である。旅館は、三河屋、開花ホテル。

千筋ノ瀧、笛塚（新羅三郎が、豐原時秋に笙の秘曲を授けし所）鷹ノ巣山等は、好散歩

地である。

ヘ、强羅

登山電車の終點、海拔二千六百尺、强羅遊園地は、三十七萬坪、設備完全である。遊園地の周圍は、絶好の別莊地である。泉質は鹽類性硫黄泉で、皮膚病、リューマチス、痛風、腺病、婦人病、花柳病に特効がある。旅館は强羅館、末廣、招雲臺。

浅間山——三千六百四十七尺……宮ノ下小湧谷より往復二時間。

明星ヶ岳……宮ノ下より堂ヶ島をへ、早川をわたつて登る。往復四時間、歸りは宮城野へ下る方がよい。

宮ノ下より道了權現迄三里。

二、宮ノ下元箱根間

イ、蘆ノ湯

海拔二千八百六十尺、十四湯中最高所にある。硫黄泉で、皮膚病、リユーマチス、痛風花柳病、子宮病に特効がある。旅館は紀伊ノ國屋、松坂屋。

飛龍ノ瀧、龍頭ノ瀧は、納涼には好適である。二子山登山、駒ケ岳登山（海拔四千三百七十尺）は、好散策地である。

ロ、湯ノ花澤

海拔三千三百尺、蘆ノ湯より八町、小涌谷より近道十四町。硫黄泉であるが、旅館はない。泉質激烈であるからして、長く入つてゐてはいけない。こゝより、神山の頂上迄二十五町。山は海拔四千七百尺、登路は險である。

ハ、箱根町

海拔二千三百八十尺、舊東海道五十三次の一で關所のあつた所である。塔ケ島離宮關所址は見るべきである。箱根ホテル、遠州屋、石内は、旅館として立派なものである。東海道線開通以來一時衰へたが、近來元箱根と共に別莊地として繁盛してきた。

大湧谷の大觀

ニ、箱根權現

元箱根より湖畔を西へ行くこと三町。鎌倉幕府の時崇敬大いに加はり、走湯權現（伊豆山）と相並び修法特驗の壇場であつた。戰國を經て漸く衰へた。

吉田博士云ふ

「源頼朝兵を伊豆に起し、當社に祈誓し、遂に幕府を鎌倉に建つ。乃箱根走湯をば二所と稱し年毎に將軍參詣あり。或は奉幣使を立られ、其崇敬大方ならず。

寶物拜觀料十錢。

ホ、曾我兄弟の墓

元箱根から、蘆ノ湯へ達しやうとする七八町手前、道の右方の石段の上に、弘法大師作と云はれる石地藏がある。石地藏から、少しいつた所の道の右方に、曾我兄弟の墓と云ひ傳へられてゐるものがある。虎女の墓も其傍らにある。

へ、蘆ノ湖舟遊

湖は、東西半里。南北一里半。週廻四里半。最水深三十七尋。元箱根及び箱根町には、モーターボート、和船の設備がある。

モーター(八人乘)

一時間四圓、半日十二圓、一日二十圓

和船

一時間九十錢(船夫一人賃金一圓四十錢)

釣りをする場合には、帝室林野局箱根出張所から、許可をえ、更らに、料金をおさめなければならぬ。(半日六十錢、一日一圓、三日三圓)

湖水で泳ぐことは危險であるからして、よく〳〵注意しなければならぬ。

三、箱根町と湖尻間

箱根町及び元箱根から、モーターボート及び和船で湖尻へ渡る。但し船は、湖尻には備へつけてないからして、湖尻の方から、箱根町へ向つて乘ろうと云ふには、豫め電話で、箱根又は元箱根の旅館へ交渉しなければならぬ。

モーターボート　片道二圓八十錢(二十分)

和船　片道二圓六十錢(一時間二十分)

湖尻へ、元箱根より西に折れ、箱根神社の前を湖水に沿うてゆく道がある。徒歩約一時間半。

四、宮ノ下湖尻間

強羅迄は、登山電車の便があるが、夫れから先きは、徒歩せねばならぬ。強羅湖尻間は徒歩約三時間。

イ、大涌谷

大地獄と云はれ、箱根噴火の名殘りをとゞめてゐるのである。強羅より急坂を登ること二町である。

ロ、姥子

大涌谷より下ること八町。海拔二千八百七十七尺、泉質は鹽類泉、旅館は西村屋。

ハ、湖尻

姥子から、更らに緩やかな勾配の山坂を下ると、十四五町にして、湖尻に達する。早川の落ち口で、風光愛すべきものがある。

五、宮下御殿場間

乙女峠

宮ノ下から、木賀、宮城野、仙石原に至り、急坂二十町餘を登りつめれば乙女峠である。峠には、茶屋がある。海拔三千二百七尺。宮ノ下から、峠迄三時間かゝる。

峠から、御殿場迄二里半。傾斜緩やかな草山で、眼下に富士の裾野を見る風光は、パノラマ式である。

長尾峠

仙石村より約十町ばかり進んで左折し、約一里にして長尾峠に達する。之より三里十五町にして御殿場に達する、道幅廣くして、自働車の運轉も自在である。乙女峠は、乘馬の他は歩かなければならぬ。

宮ノ下御殿場間乘馬賃　五圓（約三時間、徒歩五時間半）

宮ノ下より長尾峠をへて御殿場迄自働車賃　三十五圓

六、湯本元箱根間

これ卽ち舊道である。湯本より左折、須雲川に沿ふて登る。畑宿をへて、元箱根に至る迄道路は、急峻ではないが、頗るアレてゐる。途中畑宿より右折して蘆ノ湯に出る道がある。湯本から、元箱根迄徒歩約三時間。又箱根町から、三島まで三里は、下り道である。

七、箱根熱海間

箱根町から熱海迄は、乘馬(七圓約四時間)の他は、徒歩でゆく。道を鞍掛山(三千二百尺)にとり、日金山(卽十國峠)迄二里。十國峠の名にそむかず、眺望は、絶佳である。少し下れば日金地藏でさる。地藏前を下ること一里半にして、熱海温泉に達する。又地藏堂の前を左折して、下ること一里半にして、湯ケ原温泉に達する。

近き中に、三島箱根町間の新道と、仙石村元箱根間の新道が開通すれば、自働車の交

欠

欠

湯河原附近の遊覽地

◎土肥實平城址　治承四年源頼朝石橋山旗揚の時旗下に集まりたる勇士の城址である。

◎三十三體の觀世音　城址から約一里の山中大なる穴があつて、穴の中に安置されて居る。

◎根府川石　眞鶴の方へ足を運ぶと根府川石の丁場があつて盛んに採掘して東京方面へ輸出する。

◎石橋山の古戰場　源頼朝旗揚げの時軍利あらず敗走した所である。因言、伊藤祐親の部下三百騎と頼朝の率いた三百騎とが平家方の大庭景親の三千の大軍と決戰した時頼朝方の眞田與一と大庭方の將と一騎付をした事などが日本外史に出て居る。

◎雉の崖　眞鶴岬の崖下にある昔頼朝が北條時政などゝ石橋山を落ち延び主從僅かに隱れ居りしを梶原平三景時が援けたので名高い。

熱海温泉

日本屈指の名温泉である。震災の爲め、熱海輕便鐵道は不通になつた。けれ共、東海道線は近き中に熱海を輕由することゝなるので、其時の繁盛が思ひやられる。

小田原から熱海へゆく間の海岸に沿うた斷崖の上の道路は根柢から破壞されたので、復舊には猶相當の日數を要するだらう。隨つて、小田原から輕鐵を利用することは出來ない。どうしても舟行をいとふ人は、豆相線大船驛から、馬車でゆくのであるが、之は時間と金から見て不經濟である。（最近熱海迄鐵道が開通した）

汽船賃
- 國府津熱海間……一圓十錢（二時間）
- 靈岸島熱海間……一圓九十錢（八時間）

熱海も震災の被害は大であつたが、舊態を失ふ程ではなかつた。學術的に世界に知られてゐる間歇泉の如きは、震災の結果、噴水量が增加した。

三方は山、一面は相模灘、温泉浴と海水浴とを兼備した所で、絶好の避暑地であり、避寒地である。（昔時此地は火山であつた）この地の梅園は、天下にきこえてゐる。惜しい哉、成金跋扈の爲め平民黨のゆく所ではなくなつた。

日の湯、無鹽の湯を除いては、皆鹽類泉である。小兒の腺病、痛風、脚氣、呼吸器病、神經痛に効がある。名産は雁皮紙、大島眞綿織、楠木細工である。

旅館は、熱海ホテル、富士屋、玉屋、樋口、露木其他數十軒である。熱海ホテル（七圓五十錢以上）を除いては、宿泊料三圓以上である。

熱海温泉誌云ふ。

此地近傍に勝地多く、山水の美觀に富めり。之を約めしもの熱海八景となる。

温泉寺の古松　梅園の春曉
來宮の杜鵑　初島の漁火

熱海魚見崎

魚見崎の歸帆　横磯の晩景
錦浦の秋月　和田の暮雪

温泉寺は南朝の忠臣萬里小路藤房卿の開基にして庭中に卿が手植の松あり。

梅園は加茂第二御料地に屬し四望山岳を繞らし天然の溪泉其中間を流れて興趣を添ふ春陽開花の候は數千の梅樹紛々たる香雪を飛ばし人をして自ら去るに忍びざらしむ。

錦浦は魚見崎隧道の南十數町に亘る磯濱の名稱なり奇岩海中に連り蒼松岩頭に連り岩根に碎くる海潮は千變限りなきの美趣を呈す兜岩、碁盤岩、烏帽子岩、霰岩、辨天岩、雀巣の名あり岩壁に沿う

て舟を進むれば岩腹に二の空洞あり胎内寶と云ひ狗寶と云ふ僅かに舵を轉ずれば絶壁數仞巍然として峭立せるを見る其下に激浪を嚙み一の巨巖をなせるあり。錦岩と云ふ洞中散在せる五彩の奇石は旭光に映じて金波銀浪海水に反射し燦然として錦の如く故に此の名ありそれより西すれば石壁愈々峻嶮にして下に一の洞窟あり觀音窟といふ中に觀世音を安置す。來宮は鎭守の神にして老樹森々たり境内に二株の老樟あり最も大なるは周圍五丈五尺空洞能く數人を容るゝに足る杜鵑の名所なり。初島の遠望、魚見崎、横磯の散策等又捨て難きの情あり。

喰汽館は間歇温泉の傍に設けられたる建物にして温泉場組合の經營に係る樓上より湯池を眺め得べく館内大浴槽あり、喰汽室あり、娯樂室あり、圖書室あり旅客の悠遊に開放せり。

又市内に玉突場あり大弓場あり、碁會所あり、滯在中の無聊を醫するに足る。

其他日金山、十國峠、源頼朝の一杯水、不動瀧、鸚鵡石業平井等の古跡名勝枚擧に遑あ

らず。

伊豆山温泉

伊豆山は、熱海の中にあると云ふてもよい位で、其距離は、僅かに十八町である。三面は山前は、蒼海である。この温泉は、昔は走湯と云はれてゐた。海岸に接している山脚の空洞中から湧出してゐるのを木筧を以て引いて湯瀧とし、浴客は、患部を打たせるのである。相模屋の千人風呂は、大きいので有名で浴客の遊泳自在である。箱根權現と共に鎌倉幕府の崇敬厚かつた伊豆山神社（走湯權現又は上ノ宮と云はれた）は、温泉場から、九百十六段の石段を登りつめた所にある。

祭神は、伊弉那岐、伊弉那美の二尊である。震災の被害は大であつたが、今や、復興を急ぎつゝある。無色透明の鹽類泉で、腦病に効が、

旅館は相模屋が一番有名である。一泊二圓五十錢以上。中田屋、古屋、江島屋、伊豆山

屋、井ノ口屋などは、一泊一圓五十錢以上である。

和田つみの中に向ひて出づる湯の
伊豆の小山とむべも言ひけり　實朝

伊東温泉

伊東温泉へゆくには、國府津から汽船で、三時間半（二圓）、東京靈岸島から十時間（二圓五十錢）程である。汽船の嫌いの人は豆相線大仁驛で下車して、自働車でゆくのである。（五里、自働車賃二圓五十錢）地は伊豆の東端で、後ろは山前は海、冬暖かに夏涼しく絶好の保養地である。しかも鎌倉時代を背景とした史蹟に富んでをる。玖須美の音無神社の森は、賴朝と伊東祐親の女八重姫の傷ましき戀を語り、巨刹佛現寺は、日蓮上人流謫の遺蹟で、上人の高德を傳へてゐる。

温泉は、猪戸、松原玖須美に分れ、無色透明の鹽類泉で、胃腸病、關節病、腦病等に効

がある。

「伊東は、源平對立時代既に伊豆東海岸の中心であつて豪族伊東氏の名は、曾我物語りにも載せられてある。又慶長十一年英人ウイリアムアダムス(三浦安針)が幕命に依つて、八十噸百二十噸の帆船を製造したのも此地であつた。歴史上由緒深き地である。

伊東の名は、伊豆の東浦庄、又は、伊豆の東の田であると云はれてゐる。

温泉宿は、大阪屋、伊東館、櫻屋、松林館、扇屋暖香園(以上玖須美)桝屋、湯本館山田館、東京館、(以上猪戸)葛野屋、松川館、泉屋、小川館(以上松原)宿泊料は二圓以上。

この地を根據として、伊豆の大島を探勝するは一興である。

入浴者の心得

却て湯中りをして苦しむ者もある。いくら温泉へあたゝまりに行くからと云つて、時を選ばず、度數をはからずして、無暗に湯の中へばかり入つて居ては、却て體のため

によくない。病氣によつては主治醫の指導をも仰ぎ色々心得て置かねばならぬ要件もあるが、先づ普通入浴者の心得て置くべき最も重要な點は左の通りである。

▲入浴の季節、普通の温泉では、夏季の六、七、八の三ヶ月が最も温泉療法に適した季節である。併し伊東温泉の如き氣候の中和を得た處は、春夏秋冬、一年中何れの季節でも適宜である。

▲入浴の期間　これは病症の輕いと重いとに因ることだから、豫め其時日を限ることは出來ないが、大抵の病氣は、三週間を以て温泉療法の通則としてゐる。

▲入浴の時間　温泉の質と、體質と、病症の如何に因つて一定することは出來ないが先づ最初の中は五分間位から漸次延長して四十五分間に及ぼすも差支へはない。

▲入浴の回數　これも病症によつて相違がある。普通の場合は老人で一日一回又は二回壯者で一日三回で適度である。慢性の病症を根治せんとする場合は、毎年一定の期間を選んで、二三年續けて來るに限る。

足柄探勝

足柄峠をこえて、道了權現へ出る旅程は、是非共多少なりとも風雅心のある方々へ御勸めしたい。道は、立派なのがついてるし、道路も良いからして、年老いたる人でも決して無理な旅程ではないのである。

第一日

(イ)東京驛一番列車にのつて、御殿場迄ゆく。

(ロ)御殿場から、竹之下へ出て、足柄新道を登る、頂上から、右へ山の背をゆくと、獵師八郎兵衞の家がある。新羅三郎が時秋に笙の秘曲をさずけた所と云はれる笛塚もある。峠を下つて、矢倉澤をへて道了權現に至つて泊まるのである。

第二日

道了山から、箱根へ出るか、さもなくば、松田總領へ出て、汽車で歸京するのである。

私は、大正二年に、富士と足柄と云ふ一書をあらはして以來、この探勝案をすゝめてゐる。坪谷水哉氏も、私のこの案に依つて、足柄越えをやつたとのことである。

一、足柄郡　足柄郡は相模國の西部に位して、足柄箱根の山險を以て駿河と相模とを界し、北は重嶺を以て甲斐と境して居る。恰かも足柄は、相模平野の西北の城壁の樣なものである。この郡は古來上下二郡に分れて居る。然し其境域は暫々變遷があつて、一定はして居らぬ。古の上郡下郡の境域は如何うであつた？大略足上郡は酒匂川の中流西岸竝に下游西岸の鄕里を總べたものと思はれるが、中世に至つては、郡境が混同した、然し、寛文年中に至つて、上下の郡號再び、確立し、足柄の山中を足柄上郡に屬せしめ下游左岸の地を足柄下郡に併せ且餘綾郡中村鄕の地をも入れたのである。又足柄と云ふ名

は、萬葉集に多く見えて居る。

安思我良のをてもこのもにさすわなのかなるましづみころあれひもとく（萬葉）母毛豆思麻安之我良をぶねあるきおほみめそかるらめ心はもへど（萬葉）

又阿之我利とも云ふが恐らくは、雁書總風土記に、「相模國足輕郡云々」とある足輕から出たものである。此山の杉で造つた舟の足の輕き故とは探るに足らぬ說である。

足柄山から船材を取つた事は信用するに足る。唯足輕が足柄の語源とは見られぬ。

○足柄上郡　酒匂川の峽谷をはさんだ、所謂足柄山中の地で、面積二十六方里、二十六村、人口四萬。松田に郡役所がある。古く足上郡（延喜式、正倉院文書續紀靈龜元年三月）と云はれ、和名抄には足柄上郡（註に　足辛乃加美）とある。正保改高二萬四千石、天保時代の改高は三萬四千石。

○足柄下郡　酒匂川下游、箱根山中土肥海涯の地を管内として居る。面積十四方里、人口五萬八千、二町三十村、小田原に郡役所がある。古く足下郡（萬葉集、延喜式東

大寺、法隆寺天平中文書）と云はれ和名抄には足柄下郡（註に　足辛の下）とある、正保改高二萬六千石、天保中二萬九千石である。

○足柄峠

竹之下から登る事一里十二町にして、頂上に達し下る事一里二十九町にして、矢倉澤に達する。俗に地藏峠と云はれ高さ二四六二尺である。竹の下にも、地藏堂（大雄山寶鏡寺）があり又矢倉澤にも地藏堂がある。地藏峠と俗稱するも、又いはれありと云ふべしだ。

○新道古道　今は新道、古道、とある。新道は明治八年に出來た。明治二十二年に陸軍の砲車運搬等の爲めに修繕せられて完全になつた。古への足柄路いはゆる足柄御坂は古道である。新道は草山、古道は比較的に木がある。水なき谷を隔てゝ相平行してる。今の古道は即ち、古の足柄の御坂でてる。萬葉集に、過足柄坂、見死人作歌

「安思我良の美佐可かしこみくりよの吾したばへをこちてつるかも」「安之我良の美佐可

にたして袖ふらばいはなる妹はやさに見もかも」

古事記に「倭建命、悉言向荒夫琉蝦夷等、亦平和山河荒神等而、還上幸時、到足之坂本云々」とある足柄之坂はこゝである。日本武尊吾嬬者邪の舊蹟は、記、紀の文の相違よりして、一、上州の碓日だとも二、足柄の碓日だとも云はれる、然し地理上よりして、吾妻者邪の舊蹟は、足柄の碓日だと見るが至當である。久米氏の說に依れば、宮城野から御殿場へ越える峠を碓日峠と云ひ、其峠を堺として相模の海は見えなくなるとの事である。果して、久米氏の所謂碓日峠なりや否や二段として、廣義に解して、日本武尊の吾妻者邪の舊蹟は足柄路にあるとは云へる。この足柄坂は、東海道第一の險惡で、坂東の稱も此坂から起つたのである。古くは足柄以東と云ふたが、近古に至つて、更らに、關東とも云ひ、つひに關八州の號が起つたのだ、兎に角くに、古への官道で令義解に「凡朝集使、東海道、坂東（關駿河與相模界坂也）皆乘驛馬」とある。却東海道を下る人は息津蒲原長倉横走（竹之下）をへて、足柄峠を越え、坂本へ出たのである。然るに、延曆

二十一年になつて、富士山大噴火の爲め足柄路は通れなくなつた。そこで同年五月に新に筥荷を開いた。恐らくは長倉驛邊から筥荷へかゝつたものであらふ、然し當時猶政府では足柄を大路と目して居たので、直ちに改修に着手し二十二年五月に筥荷路を廢して足柄路を復した。筥荷路を廢したとは云へ、是れ以後は足柄筥荷共に通行路となつた。元來關を諸國の要害におく事は、古制であつて、足柄の關は、古代からあつたものと思はれるが、延曆八年に、諸國の關防一切停止せられた時に、足柄關も廢された、然し昌泰二年に至つて、東國の靜肅を資けん爲めに、足柄、碓日の二關を復活した、然し其後の沿革はわからない、中世に至つては、足柄筥荷兩路共行はれて、大小公私の別はなかつた樣である。梅花無盡藏に、

「自桃園赴相州、有兩道、一日箱根、一日足柄、足柄爲近、曉陰又且快晴、詩曰、箱根雖近小桃源、尙隔神巫三島村、一步不臨山似恨、直尋足柄扞朝暾」

とあり、又宗祇が湯本で死んだ時にも、遺骸を舁がせ足柄山中をすぎたのである、然る

に徳川時代に至り足柄を塞ぎ箱根を以て公私の往來の便に供するに至つて、足柄路は、荒廢するに至つたのである、箱根にも古道新道がある。徳川時代の官道は、即ち新道で古道は湯本から峰續きに通つて居た。

○足柄關址　は、今詳かではない。新篇風土記に「古關は足柄峠の頂よりこなたに字をば明神と云ふ所あり、其邊を舊蹟ならんと云ふも、未だ確たる證得ずとある。而して又、關の廢蹟となつた、年歴も分らないのである。（昌泰二年官符、を見るべし）

足柄の山の關守いにしへは
有もやしけん跡だにもなし　（明日香井集）

行かひの道のしるべにあらましを
へだてけるかな足柄のせき　（相模家集）

足柄の關の山路を行く人は
知るも知らぬもうとからぬかな　（後選集）

○古城址　北條家で戰國時代においたもので、頂上にある儼然として形を存してをる。北邊の景色は絶佳である。右に公時山を眺め、富士の裾野を眼下に見る。

○照天様　頂上に樹木鬱蒼たる所がある。元來今の足柄路には、木が少ない殆んど草茫々たる山であるが、こゝ丈けは珍らしく森になつて居る。此中に鎮座ますが、照天様で、其下の、獵師八郎兵衛の祖先は、茶屋であつたとも追剝であつたとも云はれる。八郎兵衛の家は、竹之下の農であつたが、建久四年五月、源頼朝富士野の狩の途上、此家に休憩して四方八町の地を賜うて以來連綿として、つゞいて居るとの事である。照天様、後ろの池は、水の絶えた事がない。昔から雨乞の時は、此池に祈るとの事だ、前後二里半にあまる峠中、家は是一軒だ。

○足柄明神古址　今刈野岩村にある。矢倉澤明神は、古くは、此峠にあつたのだ。照天様より下る事二町にして、其舊址と唱ふる礎石がある。

○義光笛吹の古蹟　古城址の附近にある。箱根にも小涌谷と蘆の湯の村界に笛塚と云ふ

のがあつて、矢張、往昔新羅三郎義光が、伶人豐原時秋に笙の秘曲を傳へた舊蹟だと云うて居る。是らは何れも時秋物語から附會した故蹟であるが、足柄峠の方が事實に近いと思ふ。

○金時山　公時とも書かれ、又猪鼻嶽とも云ひ、足柄連嶺の一峯で、四千三尺の高さである。地質學から云ふと箱根火山北方の外輪で足上、足下、駿東の三郡界である。俗說に、「昔此山は坂田金時の生長した山である」と。然し、公時が足柄山で生長したとの說は、前太平記にある許りで信用は出來ぬ。此山へ上るには、仙石原から行くのが一番樂で二十五町、矢倉澤から三里、足柄峠から一里半である、山の傾斜は頂上近くで、隨分と急である。唯、面白いのは周圍の山が草山であるに、此山頂附近丈け樹木鬱蒼として居る事だ。

○矢倉澤

矢倉澤は、今、內山、平山等を併せて北足柄村と云ふて居る。足柄峠の直下に位し、其

溪流卽ち內川ば、內山で酒匂川へはいる。近世矢倉澤番所をおいた地で、形勝の地點である。矢倉澤鄉土誌に曰く「里俗、岩窟ヲヤグラト云ヒ溪谷ヲ澤ト稱スレバ、此地所謂足柄ノ八重山ノ溪間ナレバ其形容ニ因テ古ヨリ、矢倉澤ト呼ビシ地ナルヲ、後村名トモナリシニヤ」とある。此地にある嶺松山江月院の如きは、由緒不名である。

○矢倉嶽　矢倉澤の西嶺である、いはゞ矢倉澤は、山陽にあるわけだ。高さ二千八百六十一尺全山悉く草茫々たる有樣だが、頂上迄一里はある。萬葉集に和乎可鷄山とあるは、此山の舊名であるとは新篇風土記の說である。又賴朝について傳說もある。（源平盛衰記）

阿之賀利の和乎可鷄山のかつの木のわをかつさねもかつさかすとも。

○番所　番所は今も殘つて居る、これが、所謂、近世の足柄關で、小田原大久保家の守衛に屬して居た。誰れも知つてる通り、德川幕府は、箱根に嚴重なる關門を設けたが、抜け道をする者を防ぐ爲めに、

一、根府川、(伊豆方面)　二、矢倉澤　三、仙石原　四、谷　峨　五、川村(以上駿河方面)

に番所をおいたのである。矢倉澤番所もこの一である、小田原迄三里半。

○地藏堂　古道筋にある。閻魔堂と共に、古ほかしい建物であるが、反つて奥ゆかしい。御詠歌に、

むつみどり山は二國のさかひなり
　　ちかひも廣き奥の院哉

鬼鹿毛馬頭觀世音の碑がある。

○貝殼澤　地藏堂の少し下の溪流のわきにある。貝の化石を產するを以て著名である。地質學者は、是れに依つて研究の一資料を得るであらう。

○足柄明神今では矢倉明神とも云はれる。元來は峠にあつたのだが、後に矢倉嶽に遷坐し、三轉して、今の地に鎭座ます事となつたのである。景行天皇の御宇、日本武尊東征の歸路、此神が白鹿に化顯して、道案内をした事は古事記に見えて居る。兎に角く

古社である。竹之下の合戰の時にも新田方が、明神の南の原に陣を設うけた事は、梅笑論に出て居る。この明神の矢倉澤に移りましたのは、應永の頃であらうと思はれる。林氏神社考に

「足柄明神、昔赴唐、其妻神留守三歲、明神歸朝、妻神色白肥美、明神曰、思慕之情、待歸之心、必可瘦衰、今何肥而麗哉、不思我也、遂去妻神」

と。神とは云ひ乍ら、艶物語である。

○夕日瀧　高さ十五間幅二間の瀧である。内川が、土地の段階を直下する所にある。

○平　山

今、北足柄の大字である。内山と谷峨の間にある。貞應二年海道記に「逆川を立て平山を過ぎて、高倉宰相中將、苦峰山のつみぢり、急河と云ふ淵にて、底の水屑と沈みにけり」つら〳〵其昔を思へば、

流れ行きて返らぬ水の哀れにも

消えにし人の跡と見ゆらん

此地である。

○洒水瀧　この瀧は、當國隨一の瀧と云はれ、源は、矢倉ケ嶽である、三段に落ちてると云ふのが特色であるが、

一ノ瀧（高三十五間半、幅六尺許）高八間許、幅六尺許（幅同上）

と云はれる。形狀は銀河の天より落つるが如くであるが、水量の缺乏は唯一の缺點である。瀧の傍に不動堂があり又石棺がある。山北驛で下車して、此瀧を見るは、頗る便利である。

○怒田と範茂舊蹟

今福澤村の大字である。清川と云ふ溪流がある。班目、竹松、怒田、千津島等は皆永祿役帳に載つて居る。

○範茂の舊蹟　此地の清川は甲斐宰相範茂の身を投じて死んだ舊蹟であると云はれて居

る。東鑑に、

「承久三年七月十八日、甲斐宰相中將範茂、爲式部丞朝時之頂、於足柄山之麓、沈于早河底、是五體不具者、可爲最期生障碍、可入此由依所望也」

とある早川は、こゝだと云ふ事である。東鑑には、早川とあるが、承久記、海道記には清川とある。依つて範茂の死を遂げた舊蹟は、怒田の清川である。村内にある古墳を範茂の墓だと云ふが最もな事である。

○關　本

今南足柄村と改めた。松田へ一里半、小田原へ二里半ある。足柄路の古驛で延喜式にある坂本驛とは是れである。坂本驛は上郡小總驛と、駿州横走驛との中間である。當時横走と、此坂本とは、要樞の地點であつたと見え、驛馬の數は他より多く坂本驛は二十二匹である。東鑑、建久元年十月、將軍上洛の條に「四日酒匂、五日關下と」ある關下も又こゝである。更科日記に、

足柄山と云ふは、四五日かねて怖しげに暗がり渡れり、漸々入つた麓の程に、空の氣色果々しく見えず、えもいはず、茂りわたりて、いと恐しげなり、麓に宿りたる所に月もなく暗き夜の闇に、惑樣なるに遊び三人、何こよりともなく、出來たり、五十許なる一人、二十許なる一人、十四五なると有、庵の前に傘をさゝせて据ゑたり云々」

又海道記に、

「關下の宿を過れば、宅を並ぶる住民は、人を宿すを主とし、窓に歌ふ君女は客を止て夫とす、哀むべし、千年の契を、旅館の一夜の遊女らに結び、生涯の樂みを、往還の諸人の望にかく、翠帳紅閨、萬事の禮法異なりと雖、草庵柴戸、一生の觀念是同じ。」

と、

ある。當時の繁昌の有樣がわかる。遊君迄居た宿であるが、德川期に箱根か官道ときまつてからは、衰へてしまつた、唯、大山詣りの人が、松田をへて道了山へくるのと、小田原をへて道了へくるのとで賑はつたのである。

○狩野山　關本驛の南嶺で、公時山の東に並び箱根山の北を蔽うて居る。山上に明神祠あるを以て明神ケ嶽とも云ひ、塚原の西にあると云ふので、塚原山とも云ふて居る、高さは三千八百四十六尺である。最乘寺から、この山をぬけて宮城野へ出る道は景色がよい。頂上から宮城野迄三十三町ある。狩野山は一度は訪うべきだ。

○狩野極樂寺　元來、狩野と云ふ地名は、伊豆國天城山下にもあつて、延喜式輕野神社應神紀なる伊豆の枯野舟の故事を傳へておる、足柄山も又萬葉集に、「足柄小舟」とうたつて、「舟木伐」とうたつて居る。是らと何か關係があるかも知れぬ。又狩野は獸狩する、狩野の意味にもとれるが、未だ確證をえぬ。極樂寺は康永三年に僧法師（佛滿禪師、今川範國弟）の開創で、臨濟宗を奉じてをる、中興は松田尾張守憲秀である。兎に角古寺である。

○最乘寺　關本驛の西南で明神嶽の中にある、大雄山と稱して曹洞宗の名藍である。開山は了庵と云ふて、當國大住郡糟屋庄の人で、名は慧明、了庵とは其號である。通幻に從

ひ法嗣十哲の上首となつた。應永元年に古郷に歸り上曾我村笠土庵に住した、後一偉人の指導に任せて、當山を開いた、時に、矢倉澤の二神が身を人にかへて、顯れ、工事を助けたと言ひ傳へて居る。小田原記に、

「關本の最乘寺開山了庵和尚、此山に山居ありしを、大森奇栖庵常に信じ、此寺を建立しける云々」

とある。兎に角く、應永年中の草創で關東一の禪林で、法制は永平寺に倣つて居る。開祖の主義として、木を一本も伐らさぬので、樹木鬱蒼として居る。特に松之木の多い事は今も昔も變らぬ。現今益々繁昌して、當山末派の寺院は、四千〇二個寺に達して居る。關八州甲信駿豆磐城岩代陸前越後の諸國に碁布して居る。然し乍ら、最乘寺よりも名高いのは、其支配を受けて居る、道了權現社である。道了は了庵の徒弟であつて、寺傳に依ると無雙の大力で、當山を開く時、師に力を協せ、大木大石を除き、大いに働いた。又師の爲に當山守護の誓願を發起し、應永十八年、遂に天狗となつて山中に住した。是れ

卽ち道了權現社の起りである永祿三年に北條氏康が、當山に參詣した時に、一大怪事があつた。小田原記に、

八月氏康關本最乘寺へ御參詣あり、當時七堂伽藍の建立なり、開山の弟子道了と云ふ大力の僧ありしが、生ながら天狗となり、此山を守護せんと云ふ大誓願を起し、則ち天狗となり山中に住み、惡智識の住を爲せば、必ず來りて障碍をなす事疑ひなしなど、寺僧事々しく語りければ、御供の面々大ひに疑ひて末世の不思議なりなどさゝやきけるに、大風忽ち吹起り寺の屋根皆吹きとりて去る、眞に風もなく晴れたる天氣にして、如レ此のこと天狗の所爲無レ疑御信仰あり、則ち普請被二仰付一如レ本修造あり云々

とある。思ふに、了庵は諸山に云ふ山神の類であらう、明治維新の始め、權現號を止め大薩埵と改めて、小松宮彰仁親王殿下は「道了大薩埵」と云ふ親筆を寄附なされた。關本から二十八丁であるからわけない、(山麓の尼川を渡ると登山一丁目である、二十八丁目は卽ち最乘寺である、)山中に仁王門、奥ノ院、萬年松、天狗坂等見るべき箇所が多い

御寺で「御こもり」と稱して一人前九十錢でとめる。且つ寺の舊習として「ドビン」に入れて、酒は飲みほうだいであるから、上戸は訪う可しだ。

備考　大雄山伐木禁制掟

山中草木總而猥不レ可レ切事

於レ截二本木一者可レ截レ頸事

於レ截レ枝者可レ截二手足一事

於レ截レ葉可レ截レ指事

於レ刈レ草者可レ截二鬚髮一事

古人道豈不是歟、莫二山中松竹切一枝々葉々、祖翁皮肉云々

寶德三年辛未一月

開山禪師系統

宗能（五世）

最乘寺開山了庵慧明禪師

- 韻陽以遠（二世）
  - 大陽明中
- 大網明宗（三世）
  - 春屋宗能（五世）此下七派
    - 在中宗宥
    - 安叟宗楞
    - 卽庵宗覺
    - 寶山月秀
    - 天巽慶順
    - 月窓明潭
    - 雪叟宗俊
  - 夢慶華應（六世）
  - 吾寶宗粲（八世）此下五派
    - 枯笑宗英
    - 雲軸宗龍
    - 南極壽聖
    - 模庵宗範
    - 宗安宗彭
- 無極慧徹（四世）月江正文（七世）此下四派
  - 泰叟妙康
  - 華叟正蕚
  - 一州在伊
  - 密山正嚴
- 尼慧春

○塚原長泉院

今、沼田、岩原等を合せて岡本村と改め、鶴本驛の東南一里許である。沼田にも、文安三年に僧岡順が創立した、西念寺がある。然し、今では、塚原の長泉院程ではない寺だ。

○長泉院　は玉峯山と號し曹洞宗で文明二年の創立である。開山は大寧和尚で、開基は岩原城主大森八郎實賴である。永祿天正中、松田憲秀の中興で近世、寺領は二十八石である。

八　久野の總世寺

今、久野村と云はれ、小田原を距る一里許りの、山丘に倚る。

○神山權現　久野の鎭守で、北條五代記に久野神事の事は見えて居る。又入道早雲の末男、北條幻庵（幼名菊丸）の屋鋪跡及び墓は、小名中宿にある、宗祇は天文十四年に幻庵を訪問した。其事は其紀行に見えて居る。

「二月二十六日、幻庵より朝風呂に入るべきよし使あり過ぎし夜の雨、曉方よりさえ返りて有けむ。起出見れば箱根つゞきの峯々雪いと白う降れり。

箱根山霞こめたる明方の春に驚く峯の白雪

幻庵後園の山家見すべしとて、竹の枯葉踏分てしるべせられたり。安房上總の浦々窓うつ心地して、鎌倉山は茶屋の本末にかゝれり近き眺めは云ふに足らずとある。又、諏訪原は小田原役に、井伊直政の陣した所である。

○總世寺　は曹洞宗で、阿育王山と號して居る。開山安叟祐が文安中、塔澤阿育王山に蚺庵を結んで居た頃、甥に當る小田原城主大森氏賴が寺域、山林を寄附したのである。明應三年に、三浦新介義同が養父三浦介時高と不和の爲、當山に來て圓頂黑衣となつたので、三浦一門家臣等が其跡を尋ねて來會した事は諸書に見えて居る。又總世寺の鐘の銘文は史家の研究史料となる。

○松田惣領

今、松田と云ひ、上郡の郡役所がある。道了山への近道である。(山北から、道了麓迄一里半ある)秦野への別路もある。有名な雨降山へ五里、曾我村も程近い、古蹟に富んだ地である。總領とは、中世に、松田氏傳領の頃に起つた名である。總領の神田明神は、延喜式に、

足上郡一座小　　寒田神社

とある。寒田神社であらふと云はれる。足上郡に、他に寒田神社に擬す可きものがないから、恐らくは、この神田明神は、式内であらう。

○延命寺　は、遠山氏の本領建立である。永祿二年小田原役帳に「江戸遠山丹波守、百三十八貫文、西郡松田總領分」とある、寺傳に據るに

丹波守景信――隼人佐直景(永正中之人藤九郎綱景)
天文中之人――政景(天正中の人)

然し、今を去る八年前に、本堂は、燒けて、今は見る影もない。唯、名物の蘇鐵が、昔

を語るのみである。

○西明寺　松田停車場を出て、延明寺を一見し、約十町許り行くと、西明寺は、右手の山にあるいと古びた御寺で、頗る古雅である。此邊を庶子と云ふは、昔松田氏が、庶子に讓與した事があるからである、西明寺元は庶子にあつたが、文明元年後は金子にある開山は源延(淨蓮房)である。東鑑、建暦三年の條に、淨蓮房等が柳營に參上し、法華淨土、兩宗の旨趣を談じた事が見えて居る。承久三年に信州の善光寺三尊の彌陀像を模して尊とした。古文書も大分あるが慶長前のものは皆「西」と書き慶長後のものには、折々「最」と云ふのを發見する、應永後、屢々擾亂を歴て、頽廢したが、文明元年に賢昌が中興した。今ある鐘には、元祿十四年と云ふ銘がある。一度は訪ふ可き古刹である。

案　　内

諸君が、富士登山をして、成功した場合には、是非足柄を跋渉せねばならぬ、足柄路の景は、變化乏しい、然しどことなく、落ち着いた、圓滿な景である。足柄峠の絶頂まで

は、富士の裾野を一眸に聚めて、さながら、美術的のパノラマを見る樣である。峠を越えて、矢倉澤、關本路へかゝると、山中らしい感に打たれる。關本まで來ると景色ば平々凡々である。

足柄峠は、御殿場から二里半である。竹之下からの新道ほ、緩傾斜であるから、峠と云ふ樣な感じはせぬ。夏ゆけば、路傍には、百合が咲き亂れて居る。えも云はれぬ面白味がある。唯、峠には、上りに一箇所水がある丈けで、其他に水はないから、其用意は必要だ。古道は、竹之下から、少しの間は、松並木があるけれど、暫らくにして道が、絶えてしまつて、迷ひ易いから、研究者の他は通る必要がない。それに峠の絶頂から（竹之下より行きて）右に折れて、十町も行けば、古道に出るから、そこへ行けば古道の一般はわかる。矢倉澤青年會で建てた、案内標を見ると、

聖天社　十町　金時山頂上　一里半

足柄神社舊蹟　十町　新田三郎笛吹の舊蹟　十二町

とある、古道は、聖天樣の森（他には、木がない）を目當にして行けばよい。充分に古道の舊蹟を見たらば再び、新道に立ち歸り、矢倉澤へと下るのである。峠の頂きから、古道へ出で箱根へぬける道もあるが、餘程注意せぬと間違へる。矢倉澤で、前節で述べた。名所古蹟を一見して、關本の手前で、右に折れ、道了山で、御寺に一泊すると云ふ順序である。道了山から、明神嶽を越えて箱根へぬけるもよし、又は小田原へ出るも、松田へ出るも、隨意である。是が足柄路見物の順路である。

特に中學などでは、足柄へ修學旅行を企てるの必要がある。府下の各中學共、箱根へはゆくが、足柄へは行かぬ。私は、各中學で、足柄、箱根へかけて修學旅行をしてほしい。御殿場迄汽車で行き、足柄山を越え、道了を見物し、明神嶽を越えて箱根へ出ればよい。私は學生諸氏に、足柄行きをすゝめるのである。

御殿場口富士登山

東京地方を起點として、富士登山の一番近道です。この登山口は、明治十九年に開かれたのであつて、東表口と云つてゐる。海拔千五百尺、茲には、不老館、松屋、御殿場館其他旅館が整つてゐる。(大正十三年度に於ける富士登山各口よりの登山者總數十七萬人で、女が一割を占めてをる)御殿場から一里にして瀧ヶ原(旅館もある、この附近陸軍の兵舍あり、又別莊がある)更らに一里にして馬返し、茲より雜木まばらの中をぬけると一里にして太郎坊へ出る。太郎坊から燒原を歩いてゆくと、一合目へ出る　御殿場から一合目迄三里八町。この間は、馬車人力車、自働車の便がある。

一合目邊より、以上は一面の燒原で、三合目當りから、段々傾斜が加はつてくる。四合目以上の休泊所は、石を疊んである。五合目で、寶永の噴火口を見て登るのである。馬は七合目迄ゆく。

御殿場口の下りは、壯快無比である。所謂砂走りは一氣にかけ下りることが出來るのである。

御殿場驛附近で見るべきは、

藤原宗行之墓……東五町

乙女峠……東南一里

長尾峠……東南二里半

竹之下古戰場……約一里强

須走登山口

御殿場驛から、須走村迄三里。自働車、馬車の便がある。須走は將來別莊地として、大いに發展すべき地である。この須走は、通例下山路として、重く見らてゐる。

村の北端淺間神社へ御詣りしてから登る。一里十二町馬返し迄は廣漠たる裾野である。

馬返しから、一合目迄は大森林で、植物の種類頗る豐富である。

このロでは八合目迄乘馬でゆける。八合目迄乘馬でゆけば、八町數十間歩けば、そこは山頂久須志ヶ岳神社の前である。

此ロの特徴は、山頂から、太郎坊迄、唯一氣にかけおりることが出來ることである。須走ロの旅館は、大米屋、大中樂、甲州屋、米山館、武藏館等である。宿泊料は一泊二圓以上である。

又須走の北方籠坂峠の中復に(約二十町)藤原光親卿の墓がある。

佐野瀑園と富士登山須山ロ

裾野驛の北十二町に、佐野瀑園がある。涼を貪るには誘へ向きである。又驛から三里にして須山村につく。こゝは富士登山道であるが、今は、其繁盛を御殿場に奪はれてしまつた。須山道は、途中で、御殿場道に合するのである。

建武二年竹之下の戰ひで破れて戰死した藤原高冬を祀つた佐野原神社、宗祇法師の墓のある桃園村の定輪寺も一度は杖を曳く可き所ぞかし。

三島神社

三島驛(一圓九十七錢)の東半里。輕鐵五錢。東海道屈指の大祀で、官幣大社である。大國主命、事代主命を祀り伊豆ノ國の一宮である。

三島驛附近の名勝

富士見瀑……西二町

玉澤妙法華寺……東一里半

畑毛溫泉

三島驛より駿豆鐵道大場驛(三島から十三錢)の東一里。(人力車賃三十五錢)腫物、皮

膚病、リューマチス等に特效がある。附近に、韮山城址、頼朝配所の遺址たる蛭ケ小島址江川英龍が工夫した反射爐址がある。口伊豆は、歴史上の舊跡にとんでゐる。旅館は、松屋、中華亭、琴景舍で、宿泊料は二圓乃至四圓である。

古奈温泉

駿豆鐵道伊豆長岡驛の西八町。(俥賃二十錢)古奈山の麓にあり前は田圃を控へてゐる。無色透明の鹽泉類で、温度百三十一度、疥癬、腫物、火傷、子宮病に效がある。旅館は舊本陣、宿泊料二圓以上。この温泉は東鑑にも出てゐて古い温泉だが、今では繁盛を長岡に奪はれた。この附近には横穴が多く、考古學上の好資料である。

長岡温泉

伊豆長岡驛の西十五町、(俥賃三十錢)明治四十年に發見された新温泉で、四面は一面に

修善寺温泉

青葉の丘。無色透明の鹽類泉で、ラヂウムを含有してると云ふので浴客は非常に多い。こゝより三津海水浴場え出で、沼津迄海岸を歩いて見ると面白い。

旅館は、大和屋、さかなや、山田屋等で、宿泊料は二圓以上である。

修善寺温泉

大仁驛下車(東京驛より二圓三十五錢)修善寺迄は一里八町。馬車(三十錢)人力車(五十錢)何れでも三十分間で達する。源氏の古蹟に富む。(範頼、頼家此地に幽閉せられて殺された。)延暦年間に弘法大師發見にかゝる温泉であつて、腸胃カタル、慢性

氣管支カタルに特效がある。(透明な鹽類泉) 旅館は菊屋、新井、大川、仲田屋淺羽櫻等で宿泊料は二圓乃至五圓である。

歴史地理伊豆半島云ふ。

修善寺は卽ち狩野谷温泉の代表者にして、源氏の古蹟と相俟ちて、その名全國に轟けるものなり。大仁より水晶山の下、大仁橋を渡れば早や修善寺の村内にて、温泉場はこれより約一里馬車人力車を自由に通ずべし。下田街道と字横瀨にて岐れ、桂川(一名修善寺川)の岸に沿ひ上ること十五六町の所にあり。達磨火山の輻射谷は、この處藥研狀をなし、峯巒相蹙り、溪流噴薄その中を流れて、多少狹隘の感なきに非ざるも、山奇に水清く、幽邃閑雅自ら別乾坤をなすが故、萬斛の市塵を洗ふには最も宜しかるべし特に獨鈷湯の如き、温泉の河中に湧出する點に於て、且つ發見年月日甚古く、歴史と交渉多き點に於て日本獨歩といふも不可なかるべし、温泉十三旅館明治四十四年中の浴客數、十三萬人に及べりといふ。

修禪寺はこの地と終始すべき運命を有する寺なり。延曆十七年僧空海の草創にて眞言宗たりしが、鎌倉建長寺の開祖僧蘭溪往來して臨濟宗に改め、肖廬山修禪寺と改稱す。蓋しこの地の風景、支那楊州の匡廬山に似たるを以て、斯くは名付けたるなるべし、之に擬して虎溪と稱し寺前の橋を虎溪橋といふ。元寇の後、元朝の使命を帶びて來れる、元僧寧一山は一時この寺に幽居せしめらる、その後衰頽に歸せしが、北條早雲豆州を一統するに及び、義叔父に當る、陸溪禪師(北條の人)を住せしめ、寺田を寄附し、寺殿を修築し、大に莊麗を極めしが、北條氏滅亡後は再び衰微し、面目を失ひたり。

寺前の川中に板圍の小屋見ゆ之を獨鈷湯とす磐石を鑿ちて湯槽となす修禪寺の寺記に空海上人留錫の時、獨鈷を以て開掘し、里民に教へて浴せしむといふ。岩上に立てる石造の獨鈷標は天明年中修禪寺僧大鼎和尚の建立せるものなりといふ。抑々修善寺の温泉は角閃安山岩の岩脈の兩端又その割れ目より湧出するものにて、この岩脈は幅一町程ありて、桂川を南北に横斷す。獨鈷湯はこの西端にて、白糸瀧は東端なり、されば温泉はこ

の近傍に集中す。而して獨鈷湯の邊は水道に當ると見え之を十分に放出せしむれば他の湯の分量は減少すといふ。泉質鹽類泉にして萬癒に効あり。

賴家墓に至るには、虎溪橋を渡るべし、浴舍の間を進めば、一町程にして、左手に小高き丘あり指月ヶ岡といふ。荒廢せる基宇は、指月殿にして、尼將軍が非命に斃れたる長子賴家の冥福を收めんとして、創建したる一切經堂なり、寧一山の手に成れる、指月殿の扁額は、今は修禪寺の本堂に納めらる、獨り觀音の座像のみ安置せられあれど、見る影もなし。墓は左側の一段高き處に在り元祿十六年五百回忌に相當せし時、建てたる征夷大將軍右金吾源賴家尊靈の石塔の後方五層塔をなす。賴家は賴朝の長子鎌倉第二代の將軍なりしが、比企氏の亂に與して、修禪寺に幽せられた、元久元年七月十八日この地に薨ず、年二十三愚管抄には非命の最後を遂げたることを記せり、この墓地より温泉場の東端に方り三丁許の地に御庵洞あり、十三の石塔尙存す、賴家の遭難に殉したる武士の古塚なりといひ傳へらる。浴舍四方樓の杉の湯は、昔は熊野神社の境内にて、神湯の名

ありしものなり、その後伊勢長氏時々この所へ來り浴したりと傳へらるゝもまたこの湯なりといふ。

修禪寺門前を川に沿ひて、西に上る道は、戸田街道にして道程四里あり。範賴墓はこの道を三四町進みたる右側の小山に在るも何等確證あるにあらず。抑々範賴は賴朝の弟にして、建久四年富士の卷狩に、政子夫人を慰藉したる一言により、同年八月十七日修禪寺に幽せられ、翌五年梶原景時の爲めに襲はれ今日枝神社の側に當れる信功院にて火を縱ちて自殺したることは歷史にも見ゆる所なれど、墓の所在は記錄なし。玄同放言には武藏國足立郡堀之內東光寺にありと記せども、これとて的確なるにもあらず、されば口碑にも傳はるこの地を墓とすること寧ろ穩當なるべし。この墓の西方に、安達盛長の墓と稱するものあり、これ眞僞判明せざれど、盛長は範賴の舅父にして、範賴の焚死に後るゝ七年、正治二年に逝きたるものなれば、或は人をして範賴の遺骨を拾はしめ、竊に此處に埋めしに非ざるか、而して此關係者が、亦盛長の墓を設けたるやも知るべから

ず。

虎溪橋の下は渡月橋といふ、蓋し桂川を洛西の桂川に擬したるならん。温泉の東南の嶂峰を嵐山といふも又此例にて、今や全山櫻樹を植ゑ、陽春三月花開の候に沿客の散歩地たり。修善寺の城址は、今城山公園の地、嵐山の東に聳ゆる眞葛山との間は不越坂にして今下狩野方面に聳ゆる近道を開く不越の名日本武尊の吾妻はやの故事に倣ひ、賴家の婢が賴家の死後、再び此坂を越えじといふに起りたりと、修禪寺新誌に見ゆれど無論附會の說なるべし。但しこの道は修禪寺の本道なりし事は、當地の故老の語る所なり。この坂上茶屋の前を左に上れば、二十分許りにして頂上に達す、櫓址空隍廢井等尙ほ存す正平十七年（康安元年）畠山國淸兄弟の據りし所にして、五百餘騎を以て足利基氏の二十萬騎に當り、刀折れ、矢盡き析、遂に降參したる所なり、寡兵を以て幾倍の大敵に當り、開城まで三四ヶ月を支ふるを得しは以て、如何に天嶮の地たるかを知るに難からず、地形狩野大見の門戸を扼し、田方平野を俯瞰して、展望頗る廣し。

中島溫泉

大仁驛の南三里半。道路平坦、乘合自働車（一圓五十錢）無色透明の鹽類泉で、リューマチス、痼氣に効がある。附近に嵯峨澤溫泉がある。共に設備不完全である。

湯ケ島溫泉

大仁驛の南四里。乘合自働車賃一圓五十錢。天城の西北麓、下田街道に沿ひ狩野川猫兒川の流れに臨み、幽邃の境である。無色透明の鹽類泉で、痼、眼病、打撲症に効がある。天城御獵地を控へてゐるので、冬季は、各旅館共一樣になる。湯川屋世古櫻、湯本館等がある。宿料は二圓以上である。

吉奈溫泉

大仁驛より南三里半。（乘合自働車賃一圓五十錢）香奈川に袴る天城西北麓の山中にある。湯ヶ島へ約一里である。鹽類泉で、脚氣、子宮病、消化器病に効がある。旅館は東府屋宿泊料二圓以上。他に貸別莊が十數棟ある。

舩原溫泉

大仁驛の南三里、（自働車賃一圓三十錢）天城山の北嶺中にある別天地である。弱鹽類泉で、リユーマチス、神經痛、子宮病に効がある。此所から山道四里を歩いて土肥溫泉へ出る途は面白い。旅館は舟風館、熊野屋の二軒、宿泊料は二圓以上である。

土肥溫泉

大仁驛から舟原をへて七里、舟原からは山路だから乘物はきかない。けれ共、普通は沼津驛から十三町下河原から汽船でゆく。午前五時と正午とに出る。（船賃六十錢、二時間かゝる）無色透明の鹽類泉で、リユーマチス、濕疹、ヒステリー、腺病、子宮病に効がある。冬は溫泉場、夏は海水浴地として理想である。風光には申分がない。旅館は、明治館、土肥館、高砂屋、大正館等で、宿泊料三飯付き二圓以上、海岸の農家では貸間をしてゐる。

戸田海水浴場

帝大の水泳場があるので有名である。風光は明媚である。沼津から汽船で一時間、汽船賃僅かに五十錢である。又我が國最初の西洋型船舶製造地として知られてゐる。

熱川溫泉

伊東溫泉から六里半。東京靈岸島から汽船で稻取迄ゆく。午後九時に出れば翌日の正午にはつく。稻取（模範村として、全國に其名を知られてゐる）から溫泉迄二里。後には天城の支脈を負ひ、前は相模灣。狩獵地としても好適である。交通不便の爲め俗

氣が少しもないのが何よりも嬉しい。

旅館は、福島屋、土屋、湯本屋等で、宿泊料は一圓五十錢以上。物價は低廉である。

下田港

我が國最初の開港場として、近世文明史上に特筆せらるゝ町である。昔は七十五里の遠州灘を通つて來た船は、必らず下田に寄港したものであつた、米國使節ペリーと我が全權大學頭とが會見した了仙寺、吉田松陰が米艦に托して海外渡航を企てゝ失敗した柿崎等は一見すべきである。町の北方にある海拔六百尺の下田富士は、近海航行者の目標となる山である。

東京靈岸島から下田迄三等二圓五十錢、上等三圓七十五錢、午後九時に出ると翌日の午後二時につく。大仁下田間の乘合自働車は三時間半、六圓五十錢である。

谷津温泉

下田より三里。(途中二里白濱迄馬車の便あり)下田から汽船でもゆける(四十五錢)東京靈岸島を午後九時にのれば、翌日午後一時に着く(二圓四十殘)谷津川に沿うた山峽で泉質は弱鹽類泉。旅館石田屋、まげや、河津館等、宿泊料一圓以上。

河内温泉

下田町より二十町。(山を越ゆる一里半にして谷津温泉へ出る)四方小樽をめぐらした、氣持のいゝ地である。大仁驛から玆迄十五里、乘合自働車賃四圓五十錢、三時間で達する。

鹽類泉て、眼病、皮膚病によい。旅館は松本屋金谷等で、宿泊料一圓以上。

湯ケ野溫泉

下田町より五里、(乘合自働車賃一圓三十錢)大仁驛より約十里。河津川に跨り幽玄の境である。こゝから天城山頂迄三里半、鹽類泉で、皮膚病に特効がある。旅館は江戸屋、玉屋等で宿泊料一圓以上。

下加茂溫泉

下田町より西二里半(馬車賃五十五錢)無色透明の鹽類泉で、濕疹、リューマチス、痛風に効がある。湧出量は、頗る多い。こゝから水光の美を以て知られてゐる手石の權現へは一里に足りない。旅館は遠見、紀伊國屋、泉屋等で、宿泊料は一圓五十錢以上である。

伊豆半島めぐりは、都人士に是非勸めたい。國府津から汽船で伊豆へゆき、そこからブラ〳〵歩いて、熱川谷津の二溫泉を出て下田へ出るもよい。

又大仁から、吉奈、湯ケ島、湯ケ野を經て下田へゆくもよい。下田の附近には溫泉が多い。下田から、西海岸の松崎(六里、自働車賃三圓、旅館は松會樓、橋本屋)へ出て、松崎から、土肥溫泉(松崎から山越しで六里)へ出で汽艇で沼津へ出るもよい。是非この旅行を御すゝめする。

○伊豆最南の村落、長津呂は、我國屈指の氣候のよい所である。南方に突出した岬角に石廊岬の燈臺がある。風光もよい所だが惜しい哉交通が不便である。

沼津と靜浦

東京驛より沼津驛迄一圓九十九錢。町は東駿の名邑で、水野氏の舊城下。海岸一帶は、白砂靑松、保養地としては好適地である。牛臥(驛より三十町、馬車賃二十錢)我入道(驛より三十町俥賃七十錢)、千本濱(驛より十四町俥賃三十錢)の海水浴場も程近い。

この近傍で最も平民的なのは、靜浦海水浴場である。沼津より一里(俥賃九十錢)桃の

名所桃郷とは村續きになつてゐる。風光の明媚なることゝ、波靜かなることは、東海第一である。この邊は、駿河灣岸第一の好網地で、鰹、鮪、等が澤山にとれる。旅館は保養館が有名で、宿泊料は二圓から五圓迄の間である。こゝから三津をへて長岡へゆき温泉に一泊するもよい。

富士登山大宮口

東海道富士驛で乘りかへれば約四十分で達する。この口は富士の表口で、吉田口と共に最も早く開けた所である。驛より五町、木花開耶姫命を祀つた官幣大社たる淺間神社に御詣りしてから登るのである。旅館は中村屋、偕樂園、梅月、橋本屋等。

大宮かけすばた間	二里一丁	かけすばた一合目間	三十二丁
二合目三合目間	二十五町	三合目四合目間	十五町
一合目二合目間	三十五町	自四合目至五合目	四町

自五合目至六合目	六町	自六合目至七合目	七町
自八合目至九合目	五町	自九合目至頂上	八町
自七合目至八合目	五町		

大宮名所

安母山へ	一里
甲州身延山へ	九里餘
人穴へ	四里半
白糸瀧へ（軌道の便がある）	三里
曾我神社へ	同
工藤古蹟へ	同
本門寺へ	二里

駒止下馬櫻へ　三里
大石寺へ　三里
曾我兄弟墓へ　一里半
葛野原風穴等五ヶ所あり　三十町以内
天然氷穴へ　六里
窓穴弘法大師鎭護表口御胎内　十五町

興津と江尻

東京驛より興津驛迄二圓四十六錢
東京驛より江尻驛迄二圓五十一錢

興澤江尻一帶の海岸は、風光絶佳避暑地として、避寒地として絶好の地である。興津一帶の海岸は、和歌で名高い清見湯で、古來風光の美を以て稱せられてゐる。興津海水浴場

は驛より八町。

永亨四年足利義教東海巡遊の折一夜のやどりをかさねた清見寺は驛より八町。清見寺の鐘のねは詩情をそゝる。富岳を眺めて山水の眺めをほしいまゝにする薩埵峠は驛の東北二十町である。

シテ『是は駿河國清見が關の者にて候。

子方『何なふ清見が關の者と申候か。

シテ『あらふしぎや。今物を仰られつるは。まさしく我子の千滿ごさめれ、あらめづらしや候。

ワキ『暫らく。是なる狂女は粗忽なることを申者哉。さればこそ物狂ひにて候。

シテ『なふ是は物には狂はぬものを、ものに狂ふも別れゆゑ。あふ時は何しに狂ひ候ふべき、是は正しき我が子にて候。（謠曲三井寺）

旅館は、水口屋、東海ホテル、身延樓、等宿泊料三圓以上。

江尻は、日本一の茶の輸出港たる清水港につゞいてゐる。海水浴場は驛より三町。こゝを出發點として、三保ノ松原、久能山めぐりをするのである。（旅館は大津館、清水館）

三保ノ松原

江尻驛より三保ノ松原迄一里十一町（俥賃九十錢）けれ共、三保へゆくには、發動機船を利用する方がよい。（十錢）三保には、羽衣亭、桃花園と云ふ旅館がある。夏は海水浴場となる。羽衣ノ松は外海に面してゐるので、海は、游泳には適しない。

歸りに、龍華寺、（高山博士の墓がある）鐵舟寺を見て、江尻へ歸るもよし、或は、久能山へゆき、靜岡へ出るもよい。

（A）江尻より鐵舟寺、龍華寺、久能山、三保ノ松原を經て再び江尻に歸る——約五時間
人力車賃四圓。

（B）江尻より鐵舟寺、龍華寺、久能山に詣で、三保ノ松原を經ずして再び江尻に歸る——

四時間餘人力車賃三圓五十錢。

備考——江尻、清水港間（輕鐵）約五分、五錢。

東遊のかず〳〵に、其の名も月のみやびとは、三五夜中の空にまた。滿願眞如の影となり、御願圓滿國土成就七寶充滿のたからをふらし、國土に是を施し給ふさるほどに、時うつゝて、天の羽衣も、うら風にたなびきたなびく、三保ノ松原うき島が雲の、愛鷹山やふじのたかね、かすかになりて、あまつみそらの、霞にまぎれて失せにけり。（謠曲羽衣）

久能山

江尻驛から二里三十町（俥賃一圓五十錢、自働車往復六圓）靜岡驛から二里二十六町、（俥賃二圓、自働車五人乘三圓五十錢）

山は有渡山とて海岸に沿うて隆起せる一丘、海拔八百九十尺。石磴千五十七段十七折し

て東照宮に至る。夏涼しく冬暖かい所である。玄冬の日も、寒さ知らずの地である。俗氣がないから嬉しい。

旅館は、石橋豆腐屋、望月等で、宿泊料は一圓五十錢以上。

「神まうで」云ふ。

有渡の濱邊に屹立する久能山上、家康を祭つてある山麓から十七折の石段を登つた處、老樹の間に社殿が隱見する。日光山と趣を同じくして、朱塗の極彩色に賽者の眼を眩惑させずにはおかない。

地は元城址であつたが、家康の薨ずるに及んで、遺命に依つて埋葬した處である。後年日光山に改葬されたけれども、依然德川家の二大宗廟として結構莊麗である。大祭は四月十七日行はれる。

社殿及び御唐門、東門、廊門、渡廊、玉垣は何れも特別保護建造物に指定せられ、尙寶物館內家康の遺品武器類の中には八口の刀劍が國寶に指定されてある。

山上から眺望も雄大で、東には三保ノ松原が相連り、東南は伊豆の連山より御前崎を望み、西南遙こ遠江の御前崎と相對してゐる處は、流石の駿河灣も宛も一の大池の觀がある。

石磴盤回老樹間　此中何事說重關
鐵槌難入三泉底　知是祖龍埋骨山

松本奎堂

賤機山

靜岡驛（二圓六十五錢）の西北十六町。市の北隅にある丘陵である。麓に國幣小社淺間神社がある。木花開邪姫を祀つてある。境內櫻樹が多い。

駿府城址は驛の西北七町、今川義元の墓のある臨濟寺は驛の西北二十八町にある。

靜岡は戰國頃今川氏の城下で、府中と云はれ、德川家康は、この地に隱居した。舊幕の

頃は駿府と云はれてゐた。

静岡江尻間に駿遠グラウンドがある。又延喜式内の古祀草薙神社もある。日本武尊草薙の變は燒津に非ずして實は此の地である。

静岡驛から一里二十七町に丸子ラヂウム鑛泉がある。人力車（八十錢）自働車の便がある。鹽鑛泉で、リユーマチス、腦病に効がある。南に天柱山がある。吐月峰、丸子富士にかこまれ、一仙境である。平民的な所で、一度は足を運ぶ價値がある。旅館は待月樓で一泊二圓乃至四圓。

岡部鑛泉

燒津驛（東京驛より二圓七十八錢）から、二里二十町。馬車に乘れば一時間半でゆく、（五十錢）ラヂウム、エマナイチヲンを含み、神經衰弱、皮膚病に特効がある旅館は遊仙閣、宿泊料は二圓乃至三圓。

志太鑛泉

藤枝驛（東京驛より二圓八十五錢）の西北一里。輕鐵を利用すれば便利である。四周に丘陵を負ひ、愛す可きの鄕である。無色透明の食鹽泉で、腺病に特効がある。旅館は潮生館で宿泊料は一圓乃至三圓である。

静波海水浴場

藤枝より藤相鐵道に乘り、川崎町で下車すれば僅かに二町。駿河灣に臨み、御前崎と相對し、眺望絶佳。加ふるに波静かである。（若木屋、川崎ホテル、和泉屋二圓より三圓）

秋葉詣り

掛川驛（東京驛より三圓十四錢）より秋葉山迄十里。掛川驛から、森町迄三里は、人力

車の便がある。森町からは、駕籠を雇うか、若しくは徒歩するより他はない。袋井驛からも、秋葉迄十里、驛から、若身平迄車（四圓）馬車（一圓五十錢）の便があり、若身平から秋葉神社迄は、約二里で、この間は、徒歩しなければならぬ。歸りは、天龍川を舟で下ると面白い。謠曲熊野で名高い池田へ出れば、天龍川驛へ出られる。旅館は、葉倉屋、三河屋（社前）高木屋、椀屋、萬屋（以下坂下）がよい。宿料は二圓内外である。

註　秋葉山は元大登山秋葉寺と云ひ、養老年中行基菩薩の創建である。天正中光幡和尚の中興にかゝる禪刹である。秋葉の三尺坊と云ひ俗神の的となつてゐたが、明治六年寺を廢して、三尺坊を可睡齋に移し、今は、縣社に列せられてゐる。

舞天島

舞天島は、白砂青松の間にある海水浴地、冬は避寒地である。（東京驛より舞天島驛迄三圓五十六錢）濱名湖の湖口今切迄十町。左は遠州灘も程近い、北方一帶の水邊は波靜かで

しかも遠淺、婦女子の海水浴に適する。（旅館は、茗荷屋、丸文、小松屋、伊勢屋、開春樓、寶田屋、松月、花屋、中村屋、濱名館等宿泊料三圓以上）

濱名湖畔の名勝巡遊

濱名湖は、周廻約四十里、古人の所謂遠淡海で、國名の遠江は、この湖の名から起つたのである。沿岸の風光は至る所明媚である。暇あらば、是非共濱名湖めぐりはしなければならぬ。巡航汽船區域ならば一日、徒歩ならば、三日か四日で湖畔の名勝を探ることが出來る。夏季は舞天島の丸桝郵船所から、周遊汽船が出ると云ふことである。けれ共、特に周遊を催うす場合には、汽船を傭ひ上げればよい。三十人乘一日傭上賃二十圓である。

（イ）濱名の鐵橋、昔有名であつた、濱名の長橋の跡である。

（ロ）新居　昔新居の關所のおかれた所、鎌倉時代には、橋本の宿とて、繁昌した所だが其後數度の海嘯の爲め、衰微したが、近來稍景氣を持ち直して來た。昔は東海道を通

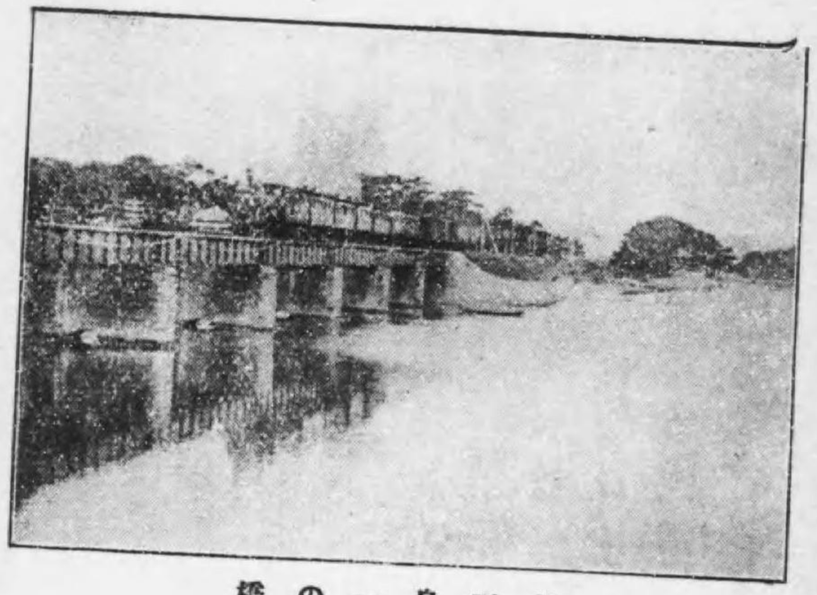
る旅客は、渡し舟で渡つたものである。

(ハ)松山海水浴　東海道線新居驛より十五町、外海に面してゐる。旅館凉風館は雜居主義で、一室四五人以上を收容する。敢へて男女の別をとはない。風光は雄大である。物價は極めて廉い。

(ニ)大正海水浴　辨天島及び新居より一里。(海樂園)

(ホ)鷲津海水浴　東海道線鷲津驛より五町旅館濱名館は、居ながら富岳をのぞみ風光頗るよい。

(ヘ)本興寺　日蓮宗の中本山、鷲津驛より五丁、本堂頗る莊嚴、襖より壁に至る迄繪は悉く文晁



辨天島一の橋

の筆になつたものである。富士を正面に臨んでゐる。

(ト)瀬戸の歸帆　雜木山左右より突出し僅か二三十間の狹間である。幽玄の景である。

(チ)猪鼻湖　濱名湖に連續してゐる。周回五里三十町、湖岸に三ヶ日の町がある。所謂姫街道の一邑である。(東海道の別路で新居に關所が出來て、女人の通行を禁んじてから、大名の奥方、姫君の行列も、この路を通るを例とした。)三ヶ日の町から三十町にして、本坂山へ出る。(風光宏大)この山麓の東を三十町ゆくと、眞言の古刹大福寺へ出る。橋本長者が賴朝の菩提を弔はん爲め、寄附した、藤原信實筆の「普賢十羅刹女圖」がある。この寺より東南へ十町ゆけば、聖武帝の御祈願所たる摩訶耶寺がある觀音瀧の飛爆がある。

(リ)井伊谷宮　古歌に名高い引佐細江(周圍三里二十町)の氣賀町から、奥山半僧坊へゆく途中にある、後醍醐帝第二皇子宗良親王が遠近の義兵をあけさせ給ひし所で、今其神靈を祈つて官幣中社伊谷神社となつてゐる。

(ヌ)館山寺　湖の東岸館山にある。湖中一二を爭ふ名勝である。僧西行が、

太刀山の巖の松の苔むしろ
　都なりせば君も見て來ん

と口ずさんだ所である。

「しほみ坂橋本の、濱名のはしを打ち渡り、シテ「旅衣かくきて見んと思ひきや、命なりけりさよの中山は之かとよ」(盛久)

濱松市

濱松は、街道屈指の都邑で、又保養地として、知られてゐる。(東京驛より濱松驛迄三圓四十七錢)

城　址……西北十五町

三方ヶ原……北一里

日本樂器製造會社……北三町

濱名之栞云ふ。

濱松市

濱松は、古引馬の鄕とも、又濱松の莊とも云ふ、其初め、天曆の頃なりとも云ひ、或は健仁の頃なりとも云ひて、詳ならず、往昔元弘建武の頃、今川家領有の際は、頗る繁華なりしも、其後戰亂打續き、天文弘治に至りては、所々に藪園ありて、人家も此所、彼所に散在して、僅に二三十戸に過ぎざりしが如し、永祿十二年、德川家康岡崎より移りて居城し、濱松と稱せしむ。

天正十年、今川氏亡ぶるや、去て駿府に行き、後豐臣秀吉此地を、堀尾吉晴に賜ひ、慶長五年、關ヶ原の役終るや、德川氏、松平忠賴に與ふ、これより日に月に繁盛に赴き、多少の變遷ありて、弘化三年、井上河内守入城、明治元年九月四日、德川家達を封ずるに及び、靜岡藩に屬し、同四年、郡縣の制起るや、濱松縣廳所在地となり、同九年八月

二十日、廢廳、靜岡縣に合せられ、爾後再三の變革あり、町村制、實施せらるゝに及びて、濱松町となり、同四十四年七月一日、市制を施行せられて市となる。

濱松よりは手前であるが、東海道線中泉驛から西北一里池田は、謠曲熊野で名高い所で、平宗盛公の愛妾熊野の墓はこの地にある。

總武線

—京成電車—
—成田鐵道線—
—霞ヶ浦方面—

龜戸天神

昔は、龜戸迄ゆけば、野趣を十分味ふことが出來たが、今では、東京京街つゞきの繁華の場所になつてしまつた。總武線龜戸驛で下車してもゆけるし、市内電車でもゆける。龜戸天神あるが故に有名である。

社傳に曰く「僧信林曾て太宰府に在りし頃、正保二年靈夢に感じ飛梅を以て新たに神像を造り、護して江戸に上りその地を卜して天滿宮を勸請すと。社殿最も美麗にして、廻

廊あり、瑞門あり、社前に池を穿ち架するに反橋を以てし、池畔紫白の藤を植え初夏の頃觀客群集す、花房の長さ丈餘に及ぶといへり。また毎一月初卯の日本社にて鶯換の神事を行ふ。俗にこれを初卯詣でと稱へて、都下の士女先を爭ふて參詣す。社前より大横川を渡れば即ち市區本所區に入る。地に絃聲あり。」と。

天神から東北三町餘の所に、有名な梅屋敷がある。この園の臥龍梅は、水戸光圀卿の命名だと云ふので、俳人歌人に賞められたものであつた。梅屋敷の東二丁餘に吾妻權現がある。

浦安辨財天

市内電車を本所龜澤町で黒江町行きに乘りかへ、高橋停留場で下り、汽船に乘れば一時間半でゆける。(賃錢は十五錢)こゝの辨財天は非常に有名で、參詣人踵を接するありさまである。辨天祠から五六町で、海岸へ出る。海水浴場としては詫へ向きである。

堀切菖蒲

京成電車曳舟(押上より七錢)で下車すればよい。又吾妻橋から小松島迄蒸汽でゆき、夫れから歩いてもよい(十五町)この地菖蒲の一名所で、菖蒲園では、小高園武藏屋が有名である。

堀切から、歩いて、木下川藥師へ御詣りして、東武線の鐘ヶ淵へ出るも半日の散歩には詫へ向きである。又木下川には、梅園もある。

向島の名勝

(イ) 三圍稻荷

市内電車吾妻橋から五町、元祿六年、旱天續きし時、俳人其角が「夕立や田を三圍の神ならば」と詠じたら稻荷の神も是に感鳴して、忽ち沛然たる雨を降らしたと云ふので、

大いに名聲を博したと云ひ傳へられておる。境内の惠比須、大黒祠は、向島七福神の一である。

（ロ）向島七福神

長命寺の辨天

弘福寺の布袋

百花園の福錄壽（文化の頃北野屋菊塢が、四季の花を培養して、當時の學者文人らと交遊した所である。今は純然たる營業の場所となつた。樂燒が有名である）

白髭神社の壽老

多聞寺の昆沙門天

（ハ）梅若山王社

天豪宗木母寺の堂前にある一小祠で、梅若丸の事蹟は、謠曲角田川等に依つて著名である。

ワキ「さても去年三月十五日。や。しかも今日のことにて候、ひと商人の都より。年の程十二三ばかりなるをさなき者を買ひ取つて。奥へ下り候が。此をさなき者。いまだならはぬ旅のつかれにや。以ての外に違例し。今は一足もひかれずとて。此河岸にひれ臥し候をなんぼう世には情なき者の候ぞ。此稚き者をば其まゝ路次に捨置商人は奥へ下つて候。

さる間此邊の人々。此稚き者の姿を見候に、よしありげに見えて候程に。様々にいたはりて候へども、前世の事にてもや候ひけん。たんだよはりによわり。既に末期と見えし時。おことはいづくゝ如何なる人ぞと。父の名字をも國をも尋ねて候へば。我は都北白河に、吉田の何某と申し人の唯一人子にて候が、父にはおくれ。母許りに添ひ奉り候ひしをひと商人にかどはされて、加様に戍行き候。誠は都の人の足手影もなつかしう候へば、此道の邊りにつきこめて、しるしに柳をうゑて給はれと。おとなしやかに念佛四五返唱へ、つひにことおはつて候。（謠曲角田川）

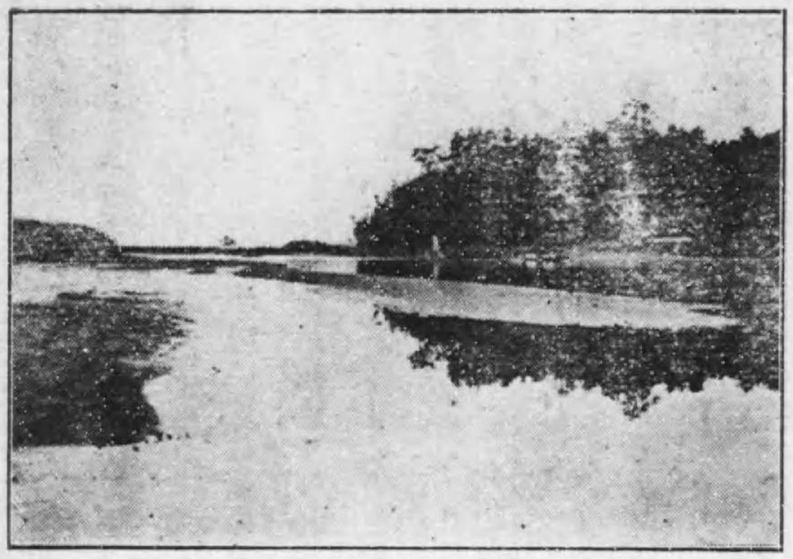
柴又帝釋天

京成電車柴又驛（十六錢）下車、寺は法華宗で、題經寺と云ふ古來の草庵を寛永年間に僧月忠が面目を一新して開山となり、其後寺運隆々として榮えてきた。本尊は長け二尺五寸幅一尺五寸ばかりの梨板で、表に帝緯天王が刻してある。家治將軍の安永八年本堂再建の際に棟上から發見せられたと云ふことである。今日猶川崎大師と同じやうに俗信の的となつてゐる。

此に川甚と云ふ川魚料理屋がある。國府臺迄舟で下ると面白い。

市川の名勝

京成電車で、市川迄十九錢。（總武線でゆくよりも電車の方が便利である）市川でおりたら、先づ國府臺へゆく。古へ下總の國府は市川にあつた。國府のわきの高臺であるからし



江戸川より國府臺を臨む

て國府臺と云ふに至つたのである。總寧寺は、今でこそあれはてたが、舊幕の頃は曹洞宗の一總錄寺で、百二十石の寺領を賜つてゐたのであつた。この地里見と小田原北條とが二度戰つた古戰場である。丘上からの眺望は頗るひろい。崖の下は江戸川である。里見俗化ヲ受ケ弘月ニワ入場料ヲ要入金幸者

之れから練兵場をつゝきつて、光金明寺（國分寺）へまいり、（弘法寺から八町）夫れから弘法寺へ御詣りする。（其間七丁）池上本門寺の末寺で一古刹である。見晴臺の眺望はよい。石段を下りて、左へゆくと手兒奈社である。御產の神と崇められてゐる。繼橋をわたれば、京成電車眞間の停留場である。今は

此邊一帶に住宅地になつた。昔は眞間の入江であつたが。……（手兒奈は眞間の里の一美女であつたが、數多の男から戀せられ、其切なる情にほだされて、眞間の入江に身を投げて死んだのである。

市川の手前小岩の善養寺の星下りの松は、一名木で一見の價値は十分にある。京王電車ならば、江戸川驛で下車すれば、僅かに數町である。

市川桃林

市川から中山迄一里の間桃林斷續して美觀を呈する。桃の花を見にいつたら八幡神社へ御詣りすべきである。（寛平年間、宇多天皇の勅願により、山城石清水の八幡を勸請したのである）神社の前に有名な八幡不知の藪がある。廣さ方二十歩にすぎないが、古へ此の中に入る人あれば、必らず祟りありと云はれてゐた。黄門記等に水戸黄門こゝに入り異人にあひたりとなすは、俗說である。

中山法華經寺

京成電車中山驛（二十五錢）から三町。總武線中山驛から五町。

正中山法華寺と號し、日蓮宗の巨刹である。本堂の後ろに、鬼子母神堂、祖師說法堂、新禱堂がある。又寺の後ろに、妙正池がある。

總武線案內云ふ。

▲法華經寺　法華宗にして正中山と號す、日蓮上人最初轉法輪の道場にして諸人の崇敬深し、寺傳に曰ふ、建長六年日蓮上人總州に遊び終に鎌倉に還らんとす、時に中山の住人富木播磨守常忍、偶々船を同うして上人の所說を聞き大に之に服す、文應元年竟に宅地を捨てゝ一宇を建て、上人をして之に居らしむ、上人是に至つて百日間の說法を試み又自ら一尊四菩薩の像を彫刻して其堂に安し之を法華堂と名く、是れ卽ち今の奥の院にして、當寺の草創なりと、寺域一萬四千百七十四坪、本堂を中央として經藏、骨堂、五

層塔、鼓楼、常唱堂等相連り堂の背後小丘の上には鬼子母神堂、祖師説法堂、祈禱堂あり、右方牆壁の中には客殿、方丈等あり、奥の院は構外右方の小路を東北に距る三町許の處に位し、開基常忍（後薙髪して日常と號す）の墓亦路を隔てゝ、其左方草坑の中に建つ、右の内祖師説法堂は、祖が彫刻したる一尊四菩薩の像を安する所にして、當山第二世の僧日高上人の父太田乗明の居館を轉じ、佛宇としたる者なりと云ひ、世俗飛彈匠が造營に係ると稱す。其他境内に於て著名なるは、常唱堂の背後に鬱茂する公孫樹にして之を泣銀杏と呼ぶ。古へ眞間弘法寺の開山日頂上人、其父常忍の怒に觸れ對顔を許されざること數年、日頂屢々當寺に來り對顔を請ふと雖ども得ず、常に此樹下に慟哭して去れり故に今に及んで其名を存すと傳ふ。又星の井あり舊蹟なり。年々八月七日、八日虫干ありて寶物の縱覽を許し、四月十三日より十九日まで千部會あり十一月十三日より十九日まで大會式ありて臨時汽瀛を出す。

江戸名所圖會に曰く、文應元年日蓮大士富木常忍が設くる所の法華堂に入り給ひ、一百

日の間妙法輪を轉じ、群生を教へ導き給ひし頃、此所の池靈婦女と化し、日々彼地に至りて説法を聽受し、信心衆に超えたり、一日彼婦女來り大士に向つて云く、妾今尊者の法施を蒙り、一乘の眞因を得たり、願はくば大士手書の本尊及び法名を賜はらんことをと、大士乃ち曼荼羅を筆し妙正といへる法名を授け給ふ、婦女喜んで去る。人怪しみ跡に隨ひ至るに、此池邊にして姿を見失ふ、然るに其本尊、忽然として傍の櫻樹の枝に懸りしより衆人之を奇とし、茲に此池の靈なるを知りて妙正と名け、後一社に奉ずと云へり、又其の婦女の往返したる道路を俗に曼荼羅小路と字し、或は蛇小路とも云ふと云々。

船橋の漁釣

船橋は北總屈指の名色。京成電車で押上から三十一錢。海は遠淺で、魚釣りには誂へ向きである。船宿は澤山にある。海水は汚いからして海水浴には適しない。この町には遊廓がある。町で見るべきは、ヨイノワ三軒

（イ）無線電信局……驛より十二町。
（ロ）船橋大神宮……驛南七町。吾妻鑑に「船橋御厨子」と見えたる社である。
（ハ）三咲の櫻……東北二里半、櫻の名所である。

習志野

總武線津田沼驛（兩國驛より三十九錢）の東北一里。乘合自働車の便がある（三十錢）東西二十五町、南北二十町、もと正伯原と云ひしが、明治六年先帝陛下が、習志野と命名し給ふたのである。今陸軍の演習地である。德川氏が牧場と定め給ひし小金ヶ原は、習志の野原につゞいてゐる。習志野から佐倉迄歩いて見ると面白い。途中印旛沼畔の風光は頗るよい。

稻毛の袖ヶ浦

總武線稻毛驛（兩國橋驛より五十四錢）より八町。（京成電車で押上より五十二錢）俥賃二十五錢。白砂青松の地で、東京近傍屈指の海水浴場である。海氣館と云ふ旅館があつて罕松枝を交へた中に客室數棟を設けてゐる。東京からつれ込みの御客がくる。養生園もある。丘の上から、根ごしに、房總の山々を見た風光は、非常によい。小舞子と云はれるのも、理りにこそ。

又驛の西十町淺間神社は、木花開邪姫を祀り、小兒の守護神として知られてゐる。

猪鼻臺

千葉驛（兩國橋驛より五十九錢）の東南十五町。舊城址で袖ヶ浦の風光を見わたされる千葉第一の勝地である。千葉寺は、市外の南方にあり、中世の豪族千葉氏の菩提寺であり、又阪東三十三ヶ所觀音の一たる靈場である。境内櫻が多い旅館は梅松家加納屋等が一流である。宿泊料三圓以上。

成東鑛泉

成東驛（兩國橋驛より一圓十六錢）の西五町。浪切不動尊の下から湧出する鑛泉を涌かしてゐる。含鐵炭酸泉である。旅館は成東館、宿泊料は二圓乃至五圓である。

飯岡海水浴場

飯岡驛（兩國橋驛から一圓五十七錢）の南一里半。（自働車賃五十錢）九十九里濱の盡くる所で、近く犬吠岬に相對し、稀れに見る勝景である。設備はよくない。又旅館も二三しかないが、人情の素朴なのが何よりも嬉しい。滯在してゐても氣持が良い。

飯岡驛の北二十八町に空海の建立と云はれる岩井不動尊がある。老樹森々たる中に四十八條の清泉が落下してゐる。尙此地から千潟八萬石の風光を展望しえて絶佳である。

瀧つぼに人もつといていとあつき

夏のひと日をくらしつる哉

九十九里濱は、上總夷隅郡の東北端太東岬から下總海上郡飯岡岬へかけて十五里の海濱、平滑な曲線で半圓形を畫いたやうに白沙唯杳渺としてゐる。魚業の盛んな地である。昔源頼朝此地へきて里數をはからんとして太東岬から一里毎に（六町一里として）矢をたてた所、北方飯岡岬に至つて、九十九でつきた。九十九里の名はこゝから起たつと云はれてゐる。

五月雨や人にも逢はぬ九十九里　素養

銚子

利根河口にある。港頭岩礁多く大船の出入に便でないが、利根の水運上の要點である。こゝから、汽船に乘つて、息栖、鹿島、香取の三社めぐりをすることも出來る、醬油、銚子縮は、名産として知られてゐる。（學生の修學旅行には、醬油釀造所を研學することが必要